

日本造園学会 100 周年記念 全国大会案内

2025 年 5 月 16 日(金)～18 日(日)

東京大学本郷地区キャンパス

公益社団法人 日本造園学会

主催 公益社団法人 日本造園学会

共催 (U35 アイデアコロキウム)
全国都市公園整備促進協議会

協賛 (公開シンポジウム)
一般社団法人 街路樹診断協会

協賛
東京都造園建設業協同組合
一般社団法人 日本造園建設業協会関東甲信総支部
一般社団法人 日本造園建設業協会東京都支部
一般社団法人 東京都造園緑化業協会

後援
公益財団法人 都市緑化機構
一般社団法人 日本造園建設業協会
一般社団法人 ランドスケープコンサルタンツ協会
全国1級造園施工管理技士の会 (一造会)
一般社団法人 公園管理運営士会
一般社団法人 日本造園組合連合会
一般財団法人 日本造園修景協会

後援 (U35 アイデアコロキウム)
東京都都市整備局

目 次

大会テーマ	1
2025 年度日本造園学会全国大会案内.....	2
タイムテーブルと会場案内.....	4
家族子ども企画 (1).....	6
定時総会	8
U35 アイデアコロキアム	9
見学会.....	16
日本造園学会賞等受賞者	17
公開シンポジウム	18
学術論文発表会	22
研究・事例発表会（口頭発表）	24
口頭発表会場早見表（学術論文発表会、研究・事例発表会）	27
研究・事例発表会（ポスター発表）	28
企画展示	38
ミニシンポジウム	39
ミニフォーラム	40
家族子ども企画 (2).....	52
造園 CPD	56
委員会名簿	57

百の景の行く先

「百」には様々な意味が込められています。百年という歳月。その歳月の中で数多くの景を生み出し、また守ってきたこと。そして、細分化すれば百あるかもしれない、今日の造園・ランドスケープ分野の職能と専門性。これらをすべて含み、本大会は「百の景の行く先」を全体テーマとし、私たちの現在地とその先について、様々な場を通じて議論します。

公益社団法人日本造園学会 2025 年度・100 周年記念全国大会案内

1. **開催期間** : 2025 年 5 月 16 日 (金) ~ 18 日 (日)
2. **開催場所** : 東京大学本郷地区キャンパス (安田講堂, 農学部他)、九段ハウス
3. **実施概要** : 各プログラムの開始前に受付がございます。時間に余裕をもってお越しください。

開催日	開催時間	プログラム	開催場所
5 月 16 日 (金)	10:00~12:00	総会	東京大学農学部 セイホクギャラリー
	14:00~17:30	U35 アイデアコロキアム	九段ハウス
	13:00~15:00	見学会	東京大学本郷地区 キャンパス
5 月 17 日 (土)	9:30~10:45	表彰式、受賞講演	東京大学安田講堂 (すべてのプログラム 参加費無料)
	11:00~12:00	100 周年記念式典	
	13:10~16:10	公開シンポジウム「百の景の行く先：ランドスケープが都市・地域を変える」	
	16:10~16:30	U35 アイデアコロキアム表彰式	
	9:00~17:30 (コアタイム 16:30~17:30)	研究・事例発表会 (ポスター発表) 企画展示 U35 アイデアコロキアム全応募作品展示	
	18:00~20:00	100 周年記念祝賀会	東京大学中央食堂
5 月 18 日 (日)	9:00~12:10	研究・事例発表会 (口頭発表) 学術論文発表会	東京大学農学部
	10:00~14:30	家族・子ども参加企画：自然体験プログラム	
	9:00~16:30	企画展示	
	13:00~14:20	ミニシンポジウム「これからの学会を考える」	
	14:30~17:45	ミニフォーラム	
	14:30~17:00	家族・子ども参加企画：特別公開フォーラム 「ランドスケープ×子ども」	

4. 参加費 (税込) :

大会参加費：会員 6,600 円、非会員 7,700 円、学生 2,200 円(賛助会員は会員と同等)

祝賀会参加費：会員 6,600 円、非会員 7,700 円、学生 2,200 円(賛助会員は会員と同等)

見学会参加費：無料

※5月17日（土）の安田講堂でのプログラムはすべて無料で参加できます。

5. 開催地アクセス：

東京大学本郷地区キャンパス

安田講堂：東京都文京区本郷 7-3-1，農学部：文京区弥生 1-1-1

【地下鉄最寄り駅】

- ・本郷三丁目駅（地下鉄丸ノ内線，大江戸線）
- ・根津駅（地下鉄千代田線）
- ・東大前（地下鉄南北線）

※詳細は https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/about/campus-guide/map01_02.html にてご確認ください。

九段ハウス

東京都千代田区九段北 1-15-9

【地下鉄最寄り駅】

- ・九段下（地下鉄半蔵門線，東西線）

※大会期間中のホテル等予約について，学会としての調整は行いません。交通手段と合わせて，早めのご予約をお願いします。

6. 参加申込：

大会運営の円滑化のために事前申込・決済制を導入します。申込受付期間は 2025 年 4 月 1 日（火）～5 月 13 日（火）です。

→事前申込はスマートフォンもしくはパソコンから行います。詳しい申込方法については，別紙および日本造園学会ホームページを参照ください。

→大会のスムーズな運営に向けて，事前申込にご協力いただきますようお願い申し上げます。

7. 大会に関するお問い合わせ：

公益社団法人 日本造園学会事務局

〒 150-0041 東京都渋谷区神南 1-20-11 造園会館 6 階

Tel: 03-5459-0515 Fax: 03-5459-0516 E メール: office@jila-zouen.org

タイムテーブルと会場案内

タイムテーブル

5月16日（金）

会場	9	10	11	12	13	14	15	16	17
弥生講堂アネックス		総会・理事会							
本郷地区キャンパス					見学会				
九段ハウス							U35アイデアコロキウム		

5月17日（土）

会場	9	10	11	12	13	14	15	16	17
安田講堂 (ホール1階)		表彰式 受賞講演	記念式典		公開シンポジウム			※1	
安田講堂 (ロビー・回廊・ ホール2階)	ロビー：企画展示、ドリンクサービス（2階） 回廊：研究・事例発表会（ポスター発表、16:30～17:30 コアタイム） ホール2階：U35アイデアコロキウム全応募作品展示								
工学部2号館・3号館		休憩室（3号館）、公開シンポジウム別室中継室（2号館）							

※1：U35アイデアコロキウム表彰式

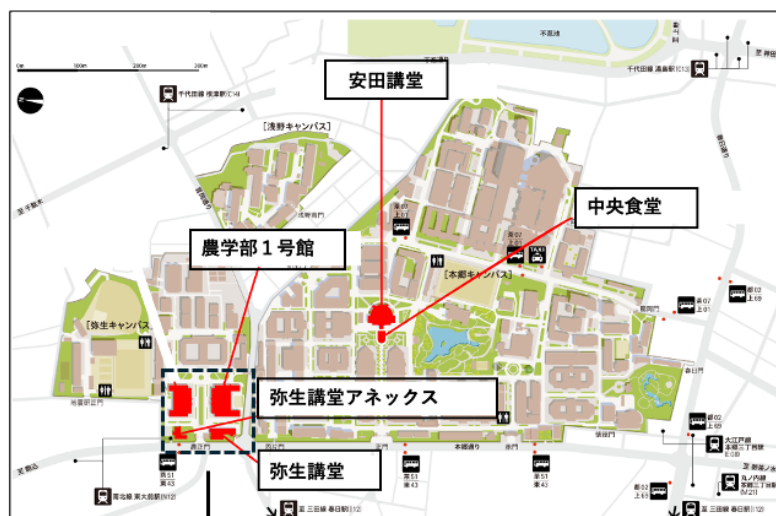
中央食堂：18:00～20:00 祝賀会

5月18日（日）

会場	9	10	11	12	13	14	15	16	17
農学部1号館	学術論文発表会 研究・事例発表会(口頭発表)						ミニ フォーラム①	ミニ フォーラム①	
第1会場（4番教室）	学術論文 発表会①	学術論文 発表会④					うたかたと まぼろし	公的な場と 祭祀の場	
第2会場（5番教室）	学術論文 発表会②	学術論文 発表会⑤					公園管理 運営指標	汐入の庭園を めぐって	
第3会場（6番教室）	学術論文 発表会③	学術論文 発表会⑥					持続的な 街路樹管理	東京100年間の 生物相変化	
第4会場（7番教室）	研究・事例 発表会①	研究・事例 発表会③					災害からの 復興と風景	造園施工分野 の20年	
第5会場（8番教室）							GREEN x EXPO 2027	100周年記念誌 作品編	
第6会場（9番教室）							クマとの すみ分け	パークマネジ メント	
第7会場（10番教室）	研究・事例 発表会②	研究・事例 発表会④					TSUNAG	国立公園の 利用者負担	
弥生講堂一条ホール					ミニシンポジ ウム「これか らの学会」		ミニ フォーラム① 公園樹木管理		
弥生講堂ロビー	企画展示、休憩所・ドリンクサービス								
弥生講堂アネックス		家族・子ども企画：自然体験プログラム					特別公開フォーラム ランドスケープ×子ども		

会場案内

【本郷地区キャンパス】



安田講堂

17日(土)

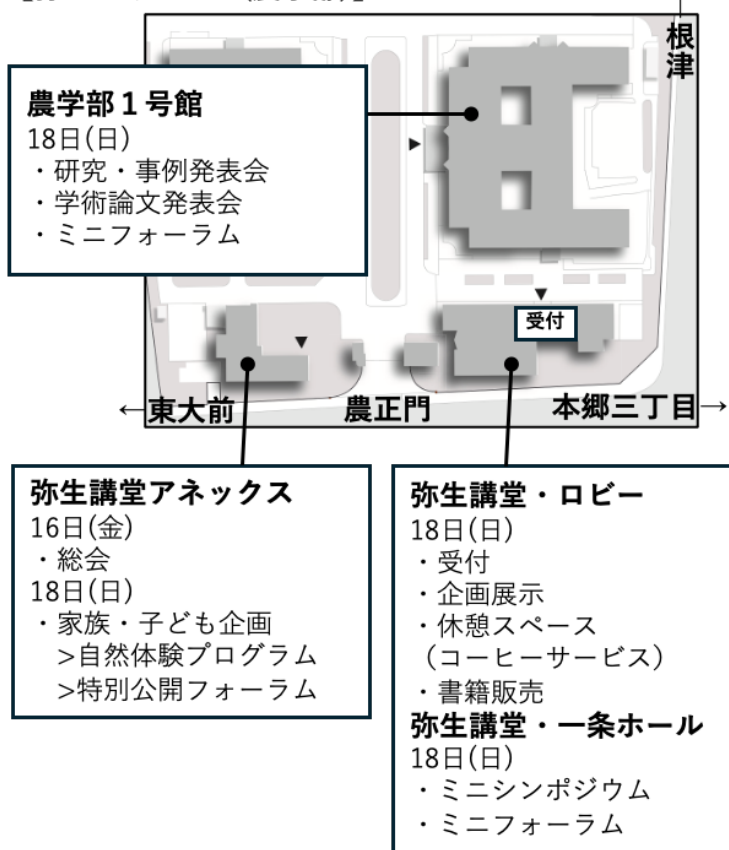
- ・表彰式、受賞講演
- ・記念式典
- ・公開シンポジウム
- ・研究・事例発表会(ポスター)
- ・企画展示

中央食堂

17日(土)

- ・祝賀会

【弥生キャンパス(農学部)】



農学部1号館

18日(日)

- ・研究・事例発表会
- ・学術論文発表会
- ・ミニフォーラム

弥生講堂アネックス

16日(金)

- ・総会

18日(日)

- ・家族・子ども企画
- >自然体験プログラム
- >特別公開フォーラム

弥生講堂・ロビー

18日(日)

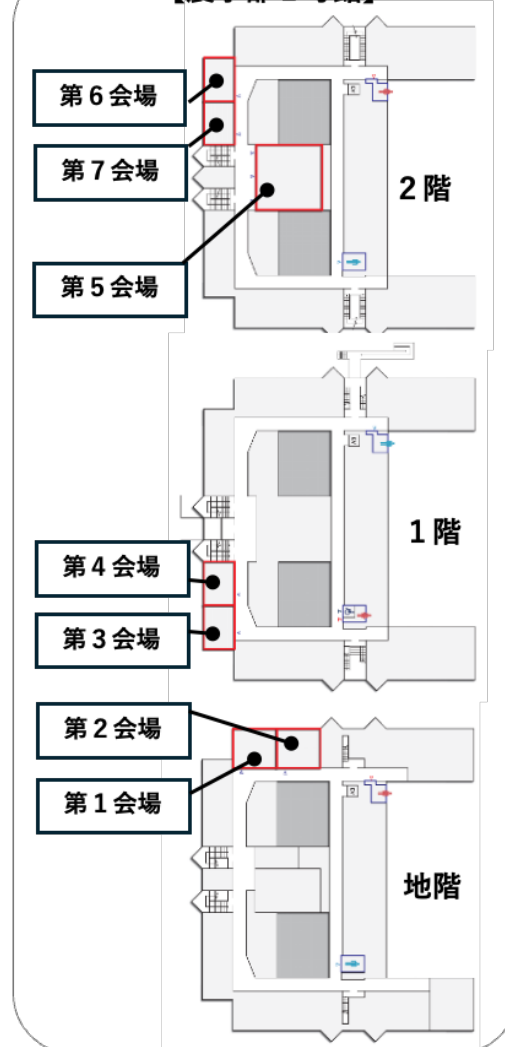
- ・受付
- ・企画展示
- ・休憩スペース(コーヒーサービス)
- ・書籍販売

弥生講堂・一条ホール

18日(日)

- ・ミニシンポジウム
- ・ミニフォーラム

【農学部1号館】



家族で学会にこう！

女性や外国籍の人を含む多様な主体の社会参加が重視される時代を踏まえ、本大会を機に、全国大会のあり方を再検討します。具体的には、学会員が家族をつれて全国大会に参加しやすい工夫として、公開シンポジウムの別室中継、および家族休憩室の設置を行います（下記）。また、お子さんが参加できる自然体験プログラムも用意します（P.52 参照）。

■公開シンポジウムの別室中継

安田講堂での公開シンポジウム「百の景の行く先：ランドスケープが都市・地域を変える」を別室にて同時中継する部屋を用意します。小さなお子さまがいて講堂での聴講が不安な方、休憩をしたい方など、どなたでもお使いいただけます。

日時：5月17日（土）13:00～16:00

別室中継室：工学部2号館223号室

- ・ 予約なしで利用可能です。直接、お部屋にお越しください。ベビーカーでの来場も可能です。
- ・ 安田講堂でもベビーカーのお預かりができます。希望者は安田講堂での受付にお申し出ください。

■家族休憩室

5月17日（土）は本郷キャンパス内に、18日（日）は弥生キャンパス内に、それぞれオムツ替え、授乳、ミルク、その他自由にお使いいただける家族休憩室を用意します。

5月17日（土）工学部3号館内「家族休憩室」

- ・ 一般公開シンポジウムが行われる安田講堂の隣の工学部3号館内に「家族休憩室」（工学部の育児支援室）を用意します。流し台、電子レンジ、冷蔵庫、おむつ替え台、ソファ、ベビーサークルなどがあります。
- ・ 利用を希望される方は、安田講堂の受付スタッフ、もしくはシンポジウムの同時中継室にいるスタッフにお声がけください。

5月18日（日）弥生講堂アネックス内「家族休憩室」

- ・ 自然体験プログラムの拠点施設である弥生講堂アネックス内に「家族休憩室」を用意します。流し台、電子レンジ、おむつ替えスペース（簡易テント）などがあります。
- ・ 利用を希望される方は、弥生講堂アネックスにいるスタッフにお声がけください。

【公開シンポジウム別室中継室、家族休憩室】



工学部3号館

17日(土)
・家族休憩室

工学部2号館

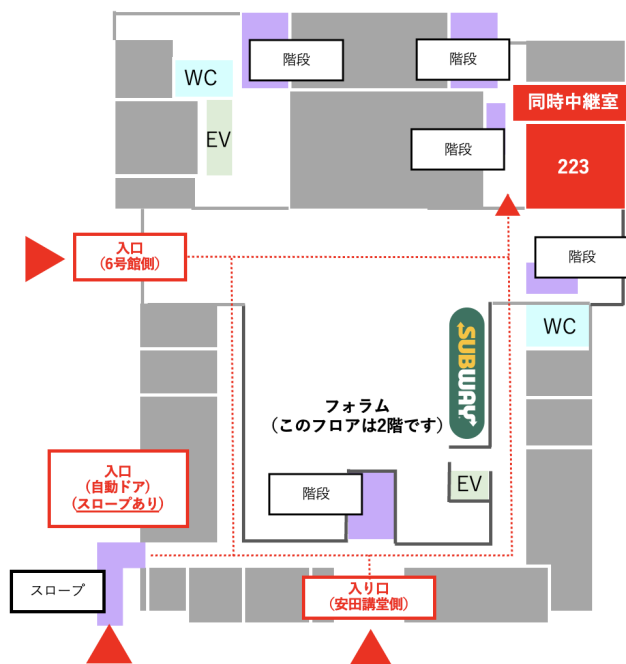
17日(土)
・公開シンポジウム
別室中継

弥生講堂アネックス

18日(日)
・家族休憩室

【公開シンポジウム別室中継室への行き方】

工学部2号館2F（地上階）



公益社団法人日本造園学会 2025 年度定時総会

日時：2025 年 5 月 16 日（金）10:00～12:00

場所：東京大学農学部 弥生講堂アネックス セイホクギャラリー
（〒113-8657 東京都文京区弥生 1－1－1）

次第：

1. 開 会

2. 会長挨拶

3. 議 事

（1）審議事項

第 1 号議案 2024 年度事業報告について

第 2 号議案 2024 年度決算について

第 3 号議案 定款の改定について

第 4 号議案 名誉会員の推薦について

第 5 号議案 2025 年度及び 2026 年度役員の選任について

（2）報告事項

第 1 号報告 2025 年度事業計画について

第 2 号報告 2025 年度収支予算について

4. 閉 会

東京百計 / 100 Tokyo Visions

日本造園学会 100 周年記念アイデアコロキウム実行委員会

共催：全国都市公園整備促進協議会

1. 趣旨

「東京百計」の「百」は“たくさん”を意味し、「計」は“ビジョン”を指す。日本造園学会 100 周年記念 U-35 アイデアコロキウム「東京百計」では、東京の具体的な空間の「景」を題材に、百者百様の「計」を募集し、応募者と審査委員との対話を通じて、将来の東京の行く先を展望する。

1925 年、日本造園学会が設立された背景には、関東大震災からの東京の復興があった。旧東京市の半分近くが焼失した未曾有の大災害からの「帝都復興計画」とそれに続く「東京緑地計画」では、東京の公園緑地系統を都市計画に位置付ける明確な「計」が打ち出され、現在の東京の「景」を形作ってきた。しかし、それから 100 年、東京は、世界規模で進行する気候変動や感染症の蔓延、拡大する格差や分断に加え、超高齢化・少子化や巨大地震の発生、経済の縮小等の多様かつ複雑な課題に直面している。そうした時代にあっては、「一意に定められた『計』」によって東京の将来像を描くことは難しい。むしろ「百人が百様にもつ『計』」を上手く束ね、社会に伝播させつつ、東京の「景」の未来を構想する運動が必要ではなかろうか。

本企画の目的は、開かれた対話のプラットフォーム（アイデアコロキウム）を作り、「百計（たくさんのビジョン）」を集結させ、応募者と審査委員のみならず本企画を目にする人々をも巻き込みながら、新たな都市像を共に議論する機会を提供することにある。本企画への応募者には、将来の東京を構想する“うねり”の端緒となるべく、多様な分野・視点にもとづく斬新なビジョンの提示と自由闊達な議論への参加を期待したい。

2. 募集課題

課題：『東京の具体的な「景」を選定し、将来のビジョンを含む「計」を提案せよ』

- ・ 本提案における「景」とは、「線のあるいは面的に範囲指定可能な空間」を指す。東京 23 区内に存在する具体的な「景」を応募者自身が選定すること
 - ※ 「線的な景」の例としては「〇〇通り」「△△川」などが挙げられる。「面的な景」の例としては「××公園」「□□駅前広場」「◇◇地区」「**流域」などが挙げられる。「〇〇通りの A から B までの区間」のように、「景」の一部分のみを計画対象として選定してもよいが、当該部分の一部が必ず東京 23 区内に含まれることが必要である
- ・ 本提案における「計」とは、将来の「ビジョン」を指す。断面図およびパース（透視図）をそれぞれ

一片以上用いて、「計」を空間的に表現すること

- ・ 本企画は、未来の東京の「景」に対し、斬新・独創的な視点にもとづく「計」の提案を問うものであり、東京にかかわる知識や経験の量や深さを問うたり、表現技術の熟練度等を問うたりするものではない

3. 応募条件

- ・ 2025 年 4 月 1 日時点で 35 歳以下の社会人・学生（高校生を含む）
- ・ 個人またはグループでの応募が可能（グループでの応募は 6 名以内として、代表者を 1 名選定）
- ・ 専門分野は問わない
- ・ 複数作品の応募が可能（複数応募する場合は、作品ごとに応募登録すること）
- ・ 入賞した場合、2025 年 5 月 16 日（金）に東京で行われるアイデアコロキウム、および 17 日（土）に行われる表彰式に代表者が参加できること
- ・ 応募作品は、未公表でオリジナルな作品とする。アイデアや表現等において他者の作品との極端な類似が見受けられる等、作品のオリジナリティが疑われる場合、その作品を失格とする場合がある

4. 作品提出

（1） 作品登録：2025 年 3 月 10 日（月）から 2025 年 3 月 31 日（月）17:00 〆切

- ・ 事前登録専用フォームに、応募者全員の氏名、所属、生年月日、代表者の連絡先を登録する
- ・ 代表者の連絡先に「登録番号」が送られる

（2） 作品応募：2025 年 4 月 1 日（火）から 2025 年 4 月 7 日（月）17:00 〆切

① A1 サイズパネル

- ・ A1 (594×841 mm) 用紙 1 枚「横」にレイアウトすること
- ・ 断面図・パース（透視図）をそれぞれ一片以上含むこと
 - ※ 手描き・CAD・CG・模型写真等、平面のグラフィックであれば表現形式は問わない
- ・ 5 mm 程度の厚さのパネルに貼って提出すること。ただし、パネルにはフレームを付けないこと
- ・ パネルには応募者の氏名を記載しないこと
- ・ パネル裏面右上隅に「登録番号」（サイズ 5 cm×5 cm）を記載すること
- ・ 送付先：TEL：03-5841-0234 ☎113-8654 東京都文京区本郷 7-3-1
東京大学工学部 14 号館 10 階 1010 号 日本造園学会 100 周年記念企画実行委員会宛
 - ※ 当日の消印有効
 - ※ 「日本造園学会 100 周年記念アイデアコロキウム作品在中」と朱書のこと
 - ※ 送料は応募者負担
 - ※ 図や文字を貼り付ける場合は、剥がれ落ちないように充分確認すること。輸送中に剥がれたものについては、事務局で責任を負わない
 - ※ パネルの使用言語は日本語または英語とすること

② PDF データ

- ・ 提出専用フォームから送付のこと
※ PDF データ以外は受け付けない（1 データ上限 50MB まで）
- ・ データは PDF 形式、200dpi 以上で作成のこと
- ・ PDF データのファイル名は「JILA(登録番号)」とすること
※ （登録番号）は登録番号 3 桁に置き換えのこと（例「JILA001」）
- ・ ZIP 化などは不要

③ 提案の概要

- ・ 提出専用フォームに、提案のタイトル、5 つのキーワード、300 字程度の提案概要、生成 AI の使用有無を入力すること
※ 紙面での提出は不要

5. 提出締め切りおよびスケジュール

- ・ 3 月 31 日（月） 作品登録〆切：事前登録専用フォームより入力
- ・ 4 月 7 日（月） 作品応募〆切：A1 パネルの郵送（消印有効）および提出専用フォーム提出専用フォームより入力
- ・ 4 月下旬 一次審査の結果発表
- ・ 5 月 16 日（金） 二次審査（アイデアコロキアム）
※ 会場：九段ハウス（東京都千代田区 <https://kudan.house>）
- ・ 5 月 17 日（土） 造園学会 100 周年記念大会における表彰式
※ 会場：東京大学本郷キャンパス安田講堂

6. 賞

- ・ 東京百計「優秀賞」（6 点）：10 万円(一律), 賞状
- ・ 東京百計「審査委員特別賞」（6 点）：賞状（※1 点の作品が複数の審査委員の特別賞を受賞することがある）
- ・ 高校生奨励賞（1 点）：賞状

7. 審査委員会

- ・ 山崎 亮 （株式会社 studio-L 代表取締役 / 関西学院大学 教授）＊審査委員長
- ・ 石川 由佳子 （一般社団法人 for Cities 共同代表理事）
- ・ 馬場 正尊 （株式会社オープン・エー 代表取締役・東北芸術工科大学 教授）
- ・ 三島 由樹 （株式会社フォルク 代表取締役 / 一般社団法人シモキタ園藝部 共同代表理事）
- ・ 山田 紗子 （合同会社山田紗子建築設計事務所 代表）
- ・ 吉川 稔 （東邦レオ株式会社 代表取締役社長）

8. 選考過程と選考のポイント

(1) 選考過程

① 一次審査（非公開）

- ・ 審査委員会が、後述する選考のポイントに沿って総合的に検討し、優れた 6 作品を一次審査通過者として選出する
- ・ 審査委員会は、提出された応募作品により審査する
- ・ 応募者の名前は匿名で審査する
- ・ 一次審査の結果は、応募者全員に登録されたメールアドレスへ通知する

② 二次審査：アイデアコロキアム（公開）

- ・ アイデアコロキアムの実施会場には、応募されたすべてのパネルを展示する予定である（ただし、応募作品数によって、作品の一部は冊子での展示のみとする場合がある）。提案の代表者は、一次審査の結果によらず二次審査会場に来場できる
- ・ 一次審査を通過した作品は、5月16日（金）に開催するアイデアコロキアムで作品をプレゼンテーションする（一次審査通過者が決定次第、該当者に詳細を通達）
- ・ 「東京百計」優秀賞は一次審査を通過した 6 作品すべてに与えられるが、審査委員特別賞は当日のアイデアコロキアムにおいて特に議論を喚起したものに与えられる
- ・ アイデアコロキアムは、下記の二部構成（Ⅰ・Ⅱ）を予定している

■ アイデアコロキアムⅠ

一次審査通過者は、九段ハウス内にそれぞれのプレゼンテーションスペースが与えられ、訪れた審査委員に対して作品に関する 5 分間のプレゼンテーションを行う。アイデアコロキアムⅠでは、一次審査提出物以外のグラフィックや表現方法（模型や映像など）を用いた、独創的なプレゼンテーションを歓迎する。プレゼンテーション後は審査委員との質疑を 10-15 分間行う。同様のセッションを審査委員が全 6 作品を巡回するまで行う

■ アイデアコロキアムⅡ

アイデアコロキアムⅠで一次審査通過者からのプレゼンテーションを受けた審査委員が、特にアイデアを喚起された作品について意見を交わしあう

- ※ プレゼンテーション用の模型の搬入等、アイデアコロキアム当日の準備については実行委員会との協議の上、行うこと
- ※ アイデアコロキアムの使用言語は日本語とする
- ※ 一次審査通過者は翌日の表彰式への参加にあたって大会参加費を徴収しない
- ※ アイデアコロキアムの模様はオンラインで配信する予定

(2) 選考のポイント

① 一次審査

- ・ 「景」の選定理由：選定された「景」は、社会のどのような課題や可能性を象徴するか

- ・ 「計」の社会的インパクト：提案された「計」は、着眼点に独自性があるか。社会に新たな視点を提供したか

② 二次審査

- ・ アイデアの議論喚起力：応募者の作品およびプレゼンテーションが、活発な議論を促進したか。その議論が、社会の課題や可能性に対して、新たな視点をもたらしたか

9. その他

- ・ 応募作品およびデータの返却は行わない
- ・ 失格要件：「応募登録用紙に虚偽の記載があった場合／応募作品中に応募者の氏名や所属の特定・推測ができる表記があった場合」は失格とする。また、使用された図面、書類等に関して著作権の問題が生じた作品については、失格とする場合がある
- ・ 著作権：応募作品の図面・書類の著作権は、応募者に帰属するが、公益社団法人日本造園学会は、本企画に関して必要な公表・出版についての権利を無料で使用できるものとする。なお、作品に使用する図版、写真等の著作権は、応募者の責任において確認等を行うこと。本実行委員会および日本造園学会はこれら著作権等に関する責任を負わない
- ・ パースなどの作成にあたり生成 AI 等を利用した場合は、使用箇所および使用した AI アプリケーション名を提出専用フォームに明記すること
- ・ 公表および出版：応募作品の全部もしくは一部、審査経緯、審査結果、講評等をまとめた「100 周年記念アイデアコロキウム」の報告を学会ホームページならびに学会誌「ランドスケープ研究」、学会ウェブサイトなどに掲載する予定である。この際、応募者の氏名、所属を公表する
- ・ アイデアコロキウム後に、会場（千代田区 九段ハウス内）にて、交流会を実施する。一次審査通過者以外も参加可能（申込制）。

10. 実行委員会・連絡先

- ・ 実行委員長：横張真（東京大学）
- ・ 実行委員：山崎嵩拓（東京大学）、遠藤賢也（東京大学）、坂本慧介（東京大学）、飯田晶子（東京大学）
- ・ 代表連絡先：jilacompe@jila-zouen.org

受賞作品一覧（登録順）

「東京百計」優秀賞 11 『ochiba』 農のある暮らし・循環の遊び場

都市型農業、小公園、緑地、農のある暮らし、循環ネットワーク

中馬 啓太（チューマアーキテクトアンドアソシエイツ）

「東京百計」優秀賞 12 Bask in the afterFlow ー再生水とぼくの出会いと旅立ちの物語

都市の水循環、下水の地域内処理、再生水路、堆肥農園コミュニティ、水辺のみどり

久保田 玲子（東京大学大学院 工学系研究科 都市工学専攻）、安藤 莉央（東京大学 工学部 都市工学科）

「東京百計」優秀賞 35 東京ホ場化作戦～わたしが耕す街路から緑がめぐる～

街路、PFI、緑循環、場の運営、都市の更新サイクル

山口 綾乃（株式会社ランドスケープデザイン）、湯川 洸平（株式会社ランドスケープデザイン）、越智のぞみ（株式会社ランドスケープデザイン）、出立 琳（株式会社ランドスケープデザイン）、中村 友香（株式会社ランドスケープデザイン）、田中 真由（株式会社ランドスケープデザイン）

「東京百計」優秀賞 54 風景を漕ぶ湊

湊、住民主体、参加型まちづくり、コミュニティ再生、プレイスメイキング

若林 英範（東京農業大学大学院 地域環境科学研究科 造園学専攻）、中西 梓穂（東京農業大学 地域環境科学部 造園科学科）、麻生 莉音（東京農業大学 地域環境科学部 造園科学科）、浅野 裕樹（東京農業大学 地域環境科学部 造園科学科）、阿部 優大（東京農業大学 地域環境科学部 造園科学科）、川田 悠太郎（東京農業大学 地域環境科学部 造園科学科）

「東京百計」優秀賞 56 孤独を相す

新宿、緑道、孤独、二面性、瞬間的な仲間意識

戸高 悠雅（千葉大学 大学院 園芸学研究科）、佐々木 達有（千葉大学 園芸学部 緑地環境学科）、謝 利亜（千葉大学 園芸学部 緑地環境学科）、炭村 匠海（千葉大学 大学院 園芸学研究科）

「東京百計」優秀賞 83 Festa Tohyo ー開かれた政治、拓かれる未来ー

政治、国会議事堂、公園化、投票、フェス

新井 奏音（法政大学大学院 デザイン工学研究科 都市環境デザイン工学専攻）、福井 新（東邦レオ株式会社）、渡 由貴（東京大学大学院 社会基盤学専攻）

「東京百計」高校生奨励賞 59 治

水害、治水、台地、永続性、生と死の風景

高橋 柚衣（群馬県立藤岡北高等学校 環境土木科）、二宮 恵美香（群馬県立藤岡北高等学校 環境土木科）、槌谷 ほのか（群馬県立藤岡北高等学校 環境土木科）、滝口 あかり（群馬県立藤岡北高等学校 環境土木科）、安齊 弦太（群馬県立勢多農林高等学校 緑地土木科）、黒澤 心優（群馬県立勢多農林高等学校 緑地土木科）

2025年 日本造園学会 100周年記念：東京百計

作品登録

作品応募

アイデアコロキウム

U-35 アイデアコロキウム

3/31

4/7

5/16

「東京百計」の目的は、ビジョンを持ち寄り対話する場「アイデアコロキウム」を開き、応募者や審査委員、本企画を目にする人々を巻き込みながら、新たな都市像を協創することにある。応募者には、将来の東京を構想する“うねり”の端緒となる、多視点にもとづく斬新なビジョンの提示と自由闊達な議論への参加を期待する

詳細と応募はこちら

<https://tokyo-2025.jila-zouen.org/ideacolloquium/>



100

TOKYO

VISIONS

東京百計

君は未来をいかに描くか？

東京の具体的な「景」を選定し、将来のビジョンを含む「計」を提案せよ

審査委員長

審査委員



山崎 亮

株式会社studio-L 代表取締役 /
関西学院大学 教授



石川 由佳子

一般社団法人 for Cities
共同代表理事



馬場 正尊

株式会社オープン・エー 代表取締役 /
東北芸術工科大学 教授



三島 由樹

株式会社フォルク
代表取締役



山田 紗子

合同会社山田紗子建築設計事務所
代表



吉川 稔

東邦レオ株式会社
代表取締役社長

賞

東京百計「優秀賞」(6点) : 10万円(一律) 賞状

東京百計「審査委員特別賞」(6点) : 賞状(1点の作品が複数の特別賞を受賞可)

高校生奨励賞(1点) : 賞状

アイデアコロキウム会場：九段ハウス(東京都千代田区九段北)

アイデアコロキウム X (旧Twitter)
<https://x.com/100tokyovisions>

お問い合わせ
jilacompe@jila-zouen.org

主催

日本造園学会100周年記念アイデアコロキウム実行委員会



日本造園学会 2025 年度全国大会見学会のご案内

2025 年度日本造園学会全国大会の会場となる東京大学本郷キャンパスは、17 世紀初頭に加賀藩の下屋敷が置かれ、1683 年に上屋敷となった歴史ある地に位置しています。その後、当地に東京医学校と東京開成学校が統合され、医学部、法学部、理学部、文学部の 4 学部の構成で東京大学が誕生しました。

本郷キャンパスには、安政の大地震（1850 年代）や明治元（1868）年の火災を経ても残存する赤門をはじめ、三四郎池を抱える育徳園や懷徳館庭園など、貴重な歴史的景観が残されています。また、関東大震災（1923 年）後に復興され、100 年の時を経て今もその姿をとどめる建築群も見どころのひとつです。

今回の見学会では、東京大学の教員と学生がガイドを務め、キャンパスのデザイン、樹木管理、継承された大名庭園などを中心に、本郷キャンパスの魅力をご紹介します。

■開催要領

日時：2025 年 5 月 16 日（金）13:00～15:00（約 2 時間）

集合：13:00 東京大学農学部正門（地下鉄「東大前」駅から徒歩 5 分）

解散：15:00 東京大学赤門付近（地下鉄「本郷三丁目」駅まで徒歩 10 分）

定員：50 名

申込：Peatix による事前申込制，無料



東京大学農学部弥生キャンパス

2024 年度日本造園学会賞等受賞者

日本造園学会奨励賞

- ①研究論文部門 ー佐々木 啓：国立公園におけるビジターセンター等の役割と利用者特性に関する一連の研究
- ②著作部門 ー福島 秀哉：＜ムラナカ＞の公共デザイン 山中湖村の生活文化と景観まちづくり
- ③技術部門 ー石浦 邦章：協働参画によるランドスケープデザインのプロセスと運用の高質化技術
- ー後藤 香奈：名勝渉成園における生物多様性を育む育成管理技術
- ー田崎 一宏：雨水貯留材を活用した街路樹植栽基盤の改良技術

日本造園学会賞

- ①著作部門 ー『生まれ変わる公園 公園リノベーションの指南書』執筆者一同
(代表：平田 富士男)：生まれ変わる公園ー公園リノベーションの指南書ー
- ー進士 五十八：進士五十八の日本庭園 技心一如で自然に順う
- ②設計作品部門 ー大野 暁彦：＜ぶるーむの風＞他、一連の林地再生をテーマとする作品
- ー荻野 彰大：福武トレス ～旧福武書店迎賓館庭園再生と新築棟への展開～
- ③技術部門 ー植彌加藤造園株式会社：椿山荘庭園における「令和十二景」の創造ー日本庭園の「心と技」の共有・共感を重ねた育成管理技術ー
- ④事業・マネジメント部門 ー東京農業大学造園科学科「農大造園の 100 年と 100 人のしごと」企画チーム
：東京農業大学造園科学科 100 周年記念 時代をつくる造園家のしごと

上原敬二賞

- ー下村 彰男
- ー鈴木 誠

テーマ「百の景の行く先：ランドスケープが都市・地域を変える」

日時：2025 年 5 月 17 日（土）13 時 10 分～16 時 10 分

会場：東京大学本郷キャンパス安田講堂（東京都文京区本郷 7 丁目 3 - 1）

主催：（公社）日本造園学会

協賛：（一社）街路樹診断協会

後援：（公財）都市緑化機構、（一社）日本造園建設業協会、（一社）ランドスケープコンサルタンツ協会、全国一級造園施工管理技士の会（一造会）、（一社）公園管理運営士会、（一社）日本造園組合連合会、（一財）日本造園修景協会

概要：

西暦 2025 年。学会設立から 100 年。「環境の世紀」の四半世紀が過ぎた現在、気候変動対策や生物多様性保全、地域の風土や文化的多様性、ウェルビーイング、健康、ネイチャーポジティブなど、造園・ランドスケープ分野に関係するこれらのキーワードは、かつてないほど社会的に注目されている。環境の全体性を扱う造園・ランドスケープ分野に求められているのは、これら様々なキーワードを独立のものとして捉えるのではなく、有機的に統合して都市・地域に実装し、より持続的で、レジリエントで、美しい風景の創造につなげていくことだろう。

しかし、100 年の歴史の中で造園・ランドスケープ分野が成熟・高度化した一方、専門分化が進んだ今日において、様々な要素の有機的統合、風景の全体像のデザイン、その社会への発信などが十分に行われているとはいえない。さらに、もはや社会全体が拡大基調には無いなかで、分野の縮小が避けられず持続性が問われているなか、自身のフィールドを近接分野に開き、オープンな発想で連携・協働を行うことはもはや前提であるという、価値観の転換も必要となっている。

ランドスケープの発想で都市・地域を変えるために、私たちは、いま、何をすべきか。そこにはどのような都市・地域のビジョンが描かれるのか。本シンポジウムでは近年都市の気候変動適応策として世界的に注目される Urban Forestry 分野の第一人者であり、欧州の都市・地域計画に大きな影響力をもつセシル・コナイネダイク氏（Nature Based Solutions Institute 代表／カナダ・ブリティッシュコロンビア大学名誉教授）を基調講演者に招き、世界的な潮流を参考にしながら議論する。

プログラム：

開会挨拶：大黒俊哉（東京大学）

第1部 基調講演・クロストーク 13:10-14:40（英語、AI リアルタイム翻訳（予定））

■基調講演：Rethinking Urban Green Spaces（都市のみどりを再考する）

セシル・コナイネダイク Cecil Konijnendijk（Nature Based Solutions Institute 代表、ブリティッシュ
コロンビア大学名誉教授）

都市のみどりに様々な役割が期待されている現状をどのように捉え、その中で専門家が何をすべきかについて、世界各国の様々な例を参照しながら議論します。

■クロストーク：Redesigning Cities with Green/Nature in Mind

（グリーンと自然の発想で都市を再設計する）

セシル・コナイネダイク（前掲）

橋本 禅（東京大学）

高取千佳（東京大学）

當内 匡（株式会社庭樹園）

モデレータ 寺田 徹（東京大学）

コナイネダイク氏にも登壇いただき、国際的な視点と国内の動向を交差（Cross Reference）させながら、都市・地域のあるべき姿と専門家の役割について議論を深めます。

<休憩>10 分

第2部 パネルディスカッション 14:50-16:00（日本語）

■パネルディスカッション：ランドスケープを再考する—都市・地域を変えるためにすべきこと

Christoph D. D. Rupprecht（愛媛大学）

松尾 薫（大阪公立大学）

恵谷浩子（奈良文化財研究所）

福岡孝則（東京農業大学）

モデレータ 秋田典子（千葉大学）

日本の都市・地域をより持続的にしていくために造園・ランドスケープの専門家は何をすべきか、学会内の様々な分野の専門家が集まり、第1部の内容を引継ぎながら議論します。

講評・閉会挨拶：加我宏之（大阪公立大学）

総合司会：別所あかね（東京大学）

日本造園学会100周年記念全国大会 公開シンポジウム

百の景の行く先： ランドスケープが 都市・地域を変える

Public Symposium of the 100th Anniversary for
Japanese Institute of Landscape Architecture

Rethinking 100 landscapes going forward:
Can landscape experts change the cities and regions?

参加費無料・学会員以外の方も大歓迎

主催 公益社団法人日本造園学会 **協賛** 一般社団法人街路樹診断協会

後援 (公財)都市緑化機構 (一社)日本造園建設業協会 (一社)ランドスケープコンサルタンツ協会
全国1級造園施工管理技士の会 (一造会) (一社)公園管理運営士会 (一社)日本造園組合連合会
(一財)日本造園修景協会

日時

2025 年
5月17日(土)
13:10-16:10

会場

**東京大学
本郷地区キャンパス
安田講堂**
(東京都文京区本郷7丁目3-3-1)

西暦2025年。学会設立から100年。「環境の世紀」の四半世紀が過ぎた現在、気候変動対策や生物多様性保全、地域の風土や文化的多様性、ウェルビーイング、健康、ネイチャーポジティブなど、造園・ランドスケープ分野に関係するこれらのキーワードは、かつてないほど社会的に注目されています。環境の全体性を扱う造園・ランドスケープ分野に求められているのは、これら様々なキーワードを独立のものとして捉えるのではなく、有機的に統合して都市・地域に実装し、より持続的で、レジリエントで、美しい風景の創造につなげていくことでしょう。

しかし、100年の歴史の中で造園・ランドスケープ分野が成熟・高度化した一方、専門分化が進んだ今日において、様々な要素の有機的統合、風景の全体像のデザイン、その社会への発信などが十分に行われているとは言い難い状況

にあります。さらに、もはや社会全体が拡大基調には無くなかで、分野の縮小が避けられず持続性が問われているなか、自身のフィールドを近接分野に開き、オープンな発想で連携・協働を行うことはもはや前提であるという、価値観の転換も必要となっています。

ランドスケープの発想で都市・地域を変えるために、私たちは、いま、何をすべきか。そこにはどのような都市・地域のビジョンが描かれるのか。本シンポジウムでは近年都市の気候変動適応策として世界的に注目されるアーバンフォレストリー分野の第一人者であり、欧州の都市・地域計画に大きな影響力をもつセシル・コナイネダイク氏(Nature Based Solutions Institute 代表/ブリティッシュコロンビア大学名誉教授)を基調講演者に招き、世界的な潮流を参考にしながら議論します。

第1部

基調講演・クロストーク

13:10-14:40

言語：英語・AIリアルタイム翻訳

Language: English with AI translation to Japanese (tentative)



基調講演「都市のみどりを再考する」

Keynote Lecture: Rethinking Urban Green Spaces

都市のみどりに対して様々な役割が期待されている現状をどのように捉え、の中で専門家が何をすべきかについて、世界各国の様々な例を参照しながら議論します。

セシル・コナイネダイク by Cecil Konijnendijk

Nature Based Solutions Institute (NBSI) 代表、プリティッシュコロンビア大学名誉教授。樹木や森林の力で都市・地域を変えるアーバンフォレスト分野の世界的第一人者であり、グリーンインフラや都市緑化全般にも数多くの研究業績をもつ。直近の単著に、「Rethinking Urban Green Spaces」(2024年、Edward Elgar社)。

クロストーク「グリーンと自然の発想で都市を再設計する」

Cross Reference Talk: Redesigning Cities with Green/Nature in Mind

コナイネダイク氏にも登壇いただき、国際的な視点と国内の動向を交差（相互参照: Cross Reference）させながら、都市・地域のあるべき姿と専門家の役割について議論を深めます。



セシル・コナイネダイク
Cecil Konijnendijk



橋本 禅
Shizuka Hashimoto
東京大学大学院
農学生命科学研究科教授



高取千佳
Chika Takatori
東京大学大学院
工学系研究科准教授



當内 匡
Tadashi Touchi
株式会社庭樹園
代表取締役



モデレータ
寺田 徹
Toru Terada
東京大学大学院
新領域創成科学研究科准教授

第2部

パネルディスカッション

14:50-16:00

言語：日本語 Language: Japanese

ランドスケープを再考する

—都市・地域を変えるためにすべきこと

日本の都市・地域をより持続的にしていくために造園・ランドスケープの専門家は何をすべきか、学会内の様々な分野の専門家が集まり、第1部の内容を引継ぎながら議論します。



クリストフ・ルプレヒト
Christoph D. D. Rupprecht
愛媛大学社会共創学部
環境デザイン学科准教授



松尾 薫
Kaoru Matsuo
大阪公立大学
大学院農学研究科
准教授



恵谷 浩子
Hiroko Edani
奈良文化財研究所
文化遺産部景観研究室
室長



福岡孝則
Takanori Fukuoka
東京農業大学
地域環境科学部造園科学科
教授



モデレータ
秋田 典子
Noriko Akita
千葉大学
大学院園芸学研究科
教授

総合司会：別所あかね（東京大学）

開会挨拶：大黒俊哉（東京大学） 閉会挨拶・講評：加我宏之（大阪公立大学）

お問い合わせ 日本造園学会事務局 Tel: 03-5459-0515 Email: office@jila-zouen.org

最新の情報はホームページをご確認ください



学術論文発表会

研究発表論文の発表が選択制になったことにともない、従来の研究発表会にかわり、研究発表論文集およびオンライン論文集に受理された論文（査読あり）の口頭発表セッションを「学術論文発表会」として別枠で設けます。当発表会では質疑応答での議論を通じて、学術分野の知見をより深めることを目指します。

日時：2025 年 5 月 18 日（日）9:00～12:10

場所：東京大学農学部 1 号館

学術論文発表会① 第 1 会場 9:00-10:30		司会 浦崎真一（大阪芸術大学）
01：	オーストラリアにおける日本庭園の多様化と日本の国際交流の変化について*	牧田直子・服部勉・鈴木誠
02：	オンライン活用を目指した庭石 3D モデル作成の事例研究*	斎藤馨・菅井一樹・張平星・栗野隆・國井洋一・檜山敦
03：	真正性からみる近代における所在地の混乱した歌枕・龍田の保存顕彰の実態と経緯*	柏元功太郎
04：	青森合浦公園の開設および開園後の公園整備に関する社会文化的観点からの史的考察*	小林昭裕
05：	新潟・白山公園の開設及び公園管理に対する社会文化的観点からの史的考察**	小林昭裕
学術論文発表会② 第 2 会場 9:00-10:30		司会 町田怜子（東京農業大学）
01：	江戸・東京の歴史的苑池を介した水系の再生に関する研究**	杉本莉菜・中島直人・永野真義・宮城俊作
02：	「芸術の梁山泊」高砂市における紙パルプ産業景観及び地域文化の形成に関する研究*	岡田昌彰・山中智世
03：	地域が運営する観光資源における協力金の使途に対する来訪者の意識について*	櫻井宏樹
04：	ガイドツアー初参加における年齢及び教育旅行での体験とガイドツアー参加経験との関係*	五木田玲子
05：	山岳道路の車両通行に対する画像解析による景観および安全性の評価について*	國井洋一・半沢千
学術論文発表会③ 第 3 会場 9:00-10:30		司会 山田順之（鹿島建設）
01：	特別史跡水城跡における緑地保全管理に関する地域住民等の現状認識と課題*	薬師寺菜加・朝廣和夫
02：	伊吹山東麓岐阜県春日地域における薬草利用と土地利用の変化*	嵯峨創平・大原歩・深町加津枝
03：	農業参入企業による農地面積拡大と地域マネジメントへの参画の特徴*	和田龍之介・松本邦彦
04：	大都市の住商混在市街地における空地の残存実態とオープンスペースとしての活用可能性**	黒島綜一郎・山崎嵩拓・坂本慧介・飯田晶子・横張真
05：	新横浜におけるグリーン・ストリート・マネジメントの成立過程と方法*	滝澤恭平・山口敬太

06:	グレートロンドンの都市公園におけるグリーンフラッグアワードの活用実態*	伊佐津愛澄・村上善明・秋田典子
学術論文発表会④ 第1会場 10:40-12:10 司会 宮本脩詩（京都府立大学）		
01:	クロモジ垣に用いられるクロモジの生産と利用の現状*	奥野真木保・貫名涼・柴田昌三
02:	我が国のカキツバタ開花景観の保全状況と地域との関り*	大澤啓志
03:	農地が点在する住宅地域の土地利用と鳥類出現状況との関係性について*	木田実里・福井亘・高林裕
04:	大阪府の照葉樹が優占する社寺林における樹林の発達程度と α 多様性からみた自然性評価*	木村登陸・上田萌子
05:	熱的快適性が屋外空間における滞在状態に与える影響に関する研究*	Quang Nguyen Huu・村上暁信
学術論文発表会⑤ 第2会場 10:40-12:10 司会 山島有喜（國學院大学）		
01:	ユネスコ世界自然遺産における緩衝地帯の設定と管理に関する考察*	李珣媛・黒田乃生
02:	大台ヶ原登山者の入山料と国立公園管理に向けた財源に関する意識*	佐々木啓
03:	国立・国定公園に近接した風力発電施設の分布から捉えたゾーニングの課題*	袁星雅・下田一太
04:	「鳴門百景」受賞写真にみる名勝鳴門に見出された移ろいの風景の変遷と観賞形式*	大平和弘
学術論文発表会⑥ 第3会場 10:40-12:10 司会 高瀬唯（茨城大学）		
01:	企業規模の観点からみた造園建設業による地域課題解決事業の展開に関する研究*	葛西芳枝・尾山真・小松亜紀子・金岡省吾・伊藤大志・市村恒士
02:	農的活動の場としての都市公園の整備およびマネジメントの実態と課題*	許国麟・柳井重人
03:	都市部の園芸愛好家を対象とした家庭園芸における農薬使用意識の分析*	御手洗洋蔵・升田有香・桐山大輝
04:	学校規模適正化が行われた小学校区における児童の屋外行動変化とその要因に関する研究*	山根麻矢・椎野亜紀夫・大島卓・御手洗洋蔵・丸山洋平
05:	東京都における保育施設から徒歩圏内にある公園・緑地の充足性評価*	飯田晶子・山崎嵩拓

*研究発表論文集、**オンライン論文集

研究・事例発表会（口頭発表）

2025 年度日本造園学会全国大会では、従来のポスターセッションに加え、口頭発表のセッションも設けた「研究・事例発表会」を開催します。この発表会は、造園・ランドスケープ分野に関わるあらゆる研究や実務に関する事例報告を、口頭・ポスターの両形式で発表し、専門性や産官学等の立場を超えて知見を共有し、造園学に関わる学生や専門家の幅広い交流を促すことを目的とするものです。

口頭発表

日時：2025 年 5 月 18 日（日）9:00～12:10

場所：東京大学農学部 1 号館

研究・事例発表会① 第 4 会場 9:00-10:30 司会 武田重昭（大阪公立大学）

01： 新約聖書の視点からみる創世記の冒頭場面・エデンの園

岡島直方（南九州大学）・尾崎二郎（別府不老町教会）

旧約聖書に新約聖書の内容を重ね合わせてみると、旧約聖書単独で分かることとは異なることが見えてくると考えられる。その点から創世記の冒頭場面やエデンの園についてまとめる。天地創造の前提、アダムとは何か、エデンの園、アダムとイエスキリストとの関係などについて検討する。帰路においてディテールを楽しむ場面でその魅力を発揮することを大きな役目として植栽されていることを指摘した。

02： 沖縄県における奥武山公園の成立とその都市史的意義に関する研究

呉 暁龍・中井 祐（東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻景観研究室）

本研究の目的は沖縄最初の近代公園「奥武山公園」の成立過程と都市史的意義を解明することである。明治期に発行された新聞と公文書を分析した結果、寄留商人の主導作用、明治期の計画内容、公共空間利用意識への影響が判明した。同時代本土公園との比較により、琉球松等の地域植生を活かした地域適応型計画思想を解明した。

03： ヨーロッパの公園墓地再生事業にみる墓地空間の新たな可能性

上田裕文（北海道大学）

ヨーロッパでは近代化を通して墓地改革が進み、森林墓地や公園墓地が誕生した。現在主流となっている公園墓地も、近年の社会変化に対応して墓地再整備の動きが活発化している。ドイツのオールスドルフ墓地、デンマークのアシテンス墓地の事例を通して、住民参加で進められる墓地再整備計画づくりと実践の様子を紹介する。

04： 明治神宮の視覚的表象は森なのか

水内佑輔（金沢大学）・中村和彦（東京大学）

神社の重要な景観要素として森がある。近年、OECMs の進展があり、環境政策の点からも神社とその森に注目が集まっている。そこで東京の明治神宮を事例として、写真投影法による現地調査を行い、森が視覚的表象であるかの検証を行った。

研究・事例発表会② 第 7 会場 9:00-10:30 司会 石井匡志（アゴラ造園）

01： 三次元点群データを活用した日本庭園植栽における動的空間特性の記譜

矢作岳（千葉大学大学院園芸学研究院／風景芸術研究所）

計測した点群データをもとに日本庭園の植栽空間を物体の有無で「色空間」と「空空間」に区分する。植栽の透かし変化と枝葉のゆらぎにおける視距離の効果を計算し、「空空間」に記譜を試みる。そして、空間体験における感覚効果の記譜の可能性や歴史的庭園の保存継承への応用可能性、空間デザインへの波及効果を考察する。

02： 樹木点検アプリの導入と拡張 ―公園維持管理業務の DX 化の試み―

萩谷知也・中尾信行（公益財団法人 東京都公園協会）

東京都公園協会では、公園樹木の安全管理の仕組みとして、樹木医による樹木診断の前段階として「樹木点検」という制度を採用しているが、作業の非効率性が課題となっていた。それを改善するため、2024 年度より、新たに「樹木点

検アプリ」の運用を開始した。ここでは、アプリの導入とその効果、拡張について紹介する。

03： 位置情報を伴うボランティア街路写真データ（VSVI）を用いた公園利用実態の把握可能性

鄭芯蕊・雨宮護（筑波大学）

公園利用の実態把握のためには従来アンケート調査や行動観察調査が用いられてきたが、より安価で簡便な方法が必要である。そこで本研究では、位置情報を伴うクラウドソース型のボランティア街路写真データ（VSVI）を用いて、公園の来園者数、利用の時空間分布、および移動経路特性をどの程度推定できるかを検証した。その結果、特に投稿量が多い公園での VSVI による推定の有効性が示された。

研究・事例発表会③ 第4会場 10:40-12:10 司会 石川啓貴（国土交通省）

01： 国立公園管理計画から見た自然景観に支障のない色彩について

福田昌代（大分大学）・高野健人（福山市立大学）・秋田典子（千葉大学）

災害多発地域における文化的景観の保全に関する研究 文化的景観「小鹿田焼の里」は日田市皿山地区の窯業集落である。河川が形成した狭隘な谷地に位置することから、2017年7月九州北部豪雨等により度重なる被災を受けてきた。災害多発地域における文化的景観の保全手法に示唆を得るため、災害履歴や作陶過程における土・水・木といったローカルな資源管理の実態を明らかにする。

02： 民話・伝承に基づく人吉球磨地域における感性的自然認識に関する研究

呉姝玥（東京大学大学院・新領域創成科学研究科）、劉銘（國學院大学・観光まちづくり学部）、中村和彦（東京大学大学院・新領域創成科学研究科）

本研究では、人吉球磨地域に伝わる妖怪の性格と地域環境との関係を整理し、地域資料館に収蔵された民話・伝承の内容をもとに、地域住民の感性的自然認識の変遷を分析した。さらに、自然観光地における環境課題の解決に資するフレームワーク構築の可能性について考察した。

03： 世界自然遺産小笠原における観光ガイドの認定制度に対する認識

武正憲・濱泰一（東洋大学）・宮本万理子（SOMPO インスティテュート・プラス、中央大学）

オーバーツーリズム対策の一つとして、観光ガイド同伴による利用者制限があるが、観光ガイドへの便益がない制度は持続しない。本研究では、一部地域で認定ガイドの同行が義務付けられている世界自然遺産小笠原を事例に、観光ガイドへのアンケート調査によって明らかになった制度による便益やその課題について報告する。

04： 計画的行動理論に基づく国立公園関係地域の若者の観光業就業意向の分析

汪 慧心・古谷 勝則（千葉大学）

国立公園は自然保護の要所であり、地域経済にも貢献しているが、人口減少により若者の流出が懸念されている。本研究では、国立公園周辺に住む若者を対象にアンケート調査を行い、計画的行動理論を用いて観光業に従事する意欲とその要因を分析した。今後地域の持続可能な発展への示唆を提供することを目的とする。

05： 日本の竹林管理活動の実態に関する研究－活動特性に着目した類型化－

水川裕紀子（九州大学）

本研究は、日本の竹林管理活動の実態を明らかにし、活動特性に基づく類型化を行うことを目的とする。林野庁の非公開データを用い、全国213の竹林管理団体の活動特性を、①地域外主体・小規模活動型をはじめとする5類型に分類し、それらと農業地域類型との関係から地域特性に応じた各管理活動の特徴と課題を明らかにした。

06： 太田市金山の植樹計画策定に向けた地域連携活動とその評価

塚田伸也（兵庫県立大学）・常見龍之介（石勝エクステリア）・森田哲夫（前橋工科大学）

市民の憩いの場として親しまれている金山（群馬県太田市）は、マツ枯れやナラ枯れの被害が確認されている。本研究は、まず、産官学（地域企業、自治体、大学）の体制により調査、ワークショップを実施し、植樹・施設計画案を立案した地域連携活動の経緯を整理する。次に地域連携活動による計画策定の評価について報告する。

研究・事例発表会④ 第7会場 10:40-12:10 司会 西山秀俊（グラック）

01： 大都市郊外の中小都市再生に向けた「サーキュラータウン」の提案とその意義

寺田徹（東京大学大学院新領域創成科学研究科）

東京大学・竹中工務店の社会連携講座（2022～2024年度）において構想された「サーキュラータウン」の考え方を紹介する。同構想は大都市郊外中小都市の再生ビジョンとして50ページ程度の「ガイドブック」にまとめられており、本発表ではその紹介と、ビジョン策定の意義や今後の展開について議論する。

02： 静岡県富士市の再開発事業とウォークアブル事業における住民組織の参画と変遷

後藤樹乃（株式会社フジヤマ）・町田怜子・竹内康・入江彰昭・茂木もも子（東京農業大学）

本研究は静岡県富士市を対象に、住民組織の参画からみる再開発事業とウォークアブル事業の変遷を明らかにすることを目的とした。まず、日本における両事業の現状を把握した。次に住民組織の参画に着目し、富士市における再開発事業とウォークアブル事業の変遷を戦略性・協働性・空間性の観点から分析し明らかにした。

03： 米国の Schoolyard Park Project と Edible Schoolyard Project にみる校庭改善の新たな方向性

嶽山洋志（兵庫県立大学大学院）

米国の「Schoolyard Park Project」と「Edible Schoolyard Project」を事例に、その空間デザインや教育プログラム、コミュニティの関わり方などを把握、今後の校庭改善や校庭を活用したプログラムの新たな方向性に関する知見を得るべく、Bay Area Park Development や Edible Schoolyard NOLA などにヒアリングを実施した。

04： 大阪北摂みどり庭園回廊構想とその実現化方策:令和の龍門瀑

都田徹（株式会社景観設計・東京）・小林紘一（Kobayashi Design）・塚本惣一郎（株式会社塚本惣一郎アーシテクト・ドゥ・ペイザージュ）

本回廊構想は、大阪府茨木市域、安威川上流の竜王山から、大阪湾の夢洲を繋ぎ、既存の公園・緑地・庭園・文化施設などのネットワークを試みる回廊です。この取り組みにより、日本庭園などの緑地空間への関心を深め、観光、日本文化の継承、地域経済の活性化、自然環境の保全、さらに地域コミュニティの活性化を目指します。

05： アクションプラン：大阪北摂みどり庭園回廊構想作成への探求 アクションプラン：大阪北摂みどり庭園回廊構想作成への探求

塚本惣一郎（株式会社塚本惣一郎アーシテクト・ドゥ・ペイザージュ）
・小林紘一（Kobayashi Design）・都田徹（株式会社景観設計・東京）

本回廊構想は、大阪の北部北摂山系を背景に大阪中心部と連続する庭園群である。この庭園群はこの地域に完結せず、都市構造として大阪市内でネットワークを作っていくことが緑地とどのように連続して展開すべきか、将来の緑地ネットワークとの連携も含め、具体的に京都市・芦屋市・ダーウィンの事例で分析提案する。

口頭発表会場早見表（学術論文発表会、研究・事例発表会）

■学術論文発表会 ※OL:オンライン論文集

時 間	第1会場				第2会場			
	セッション	演 題 名	発表者	掲載号	セッション	演 題 名	発表者	掲載号
9:00 ～ 10:30	学術論文発表会 ①	オーストラリアにおける日本庭園の多様化と日本の国際交流の変化について	牧田直子・服部勉・鈴木誠	88(5)	学術論文発表会 ②	江戸・東京の歴史的苑池を介した水系の再生に関する研究	杉本莉菜・中島直人・永野真美・宮城俊作	OL17
		オンライン活用を目指した庭石3Dモデル作成の事例研究	斎藤麗・菅井一樹・張平星・栗野悠・園井洋一・僧山敬	88(5)		「芸術の楽山治」高砂市における紙ハルブ産業景観及び地域文化の形成に関する研究	岡田昌彰・山中智世	88(5)
		真正性からみる近代における所在地の混乱した歌枕・龍田の保存顕彰の実態と経緯	柏元功太郎	88(5)		地域が運営する観光資源における協力金の使途に対する来訪者の意識について	根井宏樹	88(5)
		青森合浦公園の開設および開園後の公園整備に関する社会文化的観点からの史的考察	小林昭裕	88(5)		ガイドツアー初参加における年齢及び教育旅行での体験とガイドツアー参加経験との関係	五木田裕子	88(5)
		新潟・白山公園の開設及び公園管理に対する社会文化的観点からの史的考察	小林昭裕	OL17		山岳道路の車両通行に対する画像解析による景観および安全性の評価について	園井洋一・半沢千	88(5)
	司会 浦崎 真一（大阪芸術大学）				司会 町田 怜子（東京農業大学）			
10:40 ～ 12:10	学術論文発表会 ④	クロモジ用いられるクロモジの生産と利用の現状	栗野真木保・真名涼・柴田昌三	88(5)	学術論文発表会 ⑤	ユネスコ世界自然遺産における緩衝地帯の設定と管理に関する考察	李珣媛・黒田乃生	88(5)
		我が国のカキツバタ開花景観の保全状況と地域との関わり	大澤晋志	88(5)		大台ヶ原登山者の入山料と国立公園管理に向けた財源に関する意識	佐々木啓	88(5)
		農地が点在する住宅地域の土地利用と鳥類出現状況との関係性について	木田実里・福井亘・高林裕	88(5)		国立・国定公園に近接した風力発電施設の分布から捉えたゾーニングの課題	袁星雅・下田 一太	88(5)
		大阪府の照葉樹が優占する社寺林における樹林の発達程度とα多様性からみた自然性評価	木村登陸・上田萌子	88(5)		「噴門百景」受賞写真にみる名勝噴門に見出された移ろいの風景の実態と観賞形式	大平和弘	88(5)
		熱的快適性が屋外空間における滞在状態に与える影響に関する研究	Quang Nguyen Huu・村上陽	88(5)				
	司会 宮本 脩詩（京都府立大学）				司会 山島 有喜（国学院大学）			

時 間		第3会場			
		セッション	演 題 名	発表者	掲載号
9:00 ～ 10:30	学術論文発表会 ③	特別史跡水城跡における緑地保全管理に関する地域住民等の現状認識と課題	斎藤寺菜加・朝廣和夫	88(5)	
		伊吹山東麓岐阜春日地域における農業利用と土地利用の変化	榎嶋創平・大原歩・深町加津枝	88(5)	
		農業参入企業による農地面積拡大と地域マネジメントへの参画の特徴	和田龍之介・松本邦彦	88(5)	
		大都市の住商混在市街地における空地の残存実態とオープンスペースとしての活用可能性	黒島純一郎・山崎嵩祐・坂本慧介・飯田晶子・横張真	OL17	
		新横浜におけるグリーン・ストリート・マネジメントの成立過程と方法	浅澤義平・山口敬太	88(5)	
		グレーターロンドンの都市公園におけるグリーンフラッグアワードの活用実態	伊佐津愛澄・村上善明・秋田典子	88(5)	
			司会 山田 順之（広島建設）		
10:40 ～ 12:10	学術論文発表会 ⑥	企業規模の観点からみた造園建築家による地域課題解決事業の展開に関する研究	真野芳枝・尾山真・小松亜紀子・金岡省吾・伊藤大志・市村恒士	88(5)	
		農的活動の場としての都市公園の整備およびマネジメントの実態と課題	許国麟・柳井重人	88(5)	
		都市部の園芸愛好家を対象とした家庭園芸における農業使用意識の分析	御手洗洋蔵・升田有香・桐山大輝	88(5)	
		学校緑地緑道正化が行われた小学校区における児童の屋外行動変化とその要因に関する研究	山根麻矢・椎野登紀夫・大島卓・御手洗洋蔵・丸山洋平	88(5)	
		東京都における保育施設から徒歩圏内にある公園・緑地の充足性評価	飯田晶子・山崎嵩祐	88(5)	
		司会 高瀬 唯（茨城大学）			

■研究・事例発表会（口頭）

		第4会場			第7会場		
時 間		演 題 名	発表者	セッション	演 題 名	発表者	
9:00 ～ 10:30	研究・事例発表会 ①	新約聖書の視点からみる創世記の冒頭場面・エデンの園	岡島直方・尾崎二郎	研究・事例発表会 ②	三次元点群データを活用した日本庭園緑化における動的空間特性の記述	矢作 卓	
		沖縄県における奥武山公園の成立とその都市史的意義に関する研究	呉曉龍・中井祐		樹木点検アプリの導入と拡張 ―公園維持管理業務のDX化の試み―	萩谷知也・中尾健行	
		ヨーロッパの公園墓地再生事業にみる墓地空間の新たな可能性	上田裕文		位置情報を伴うポテンシャル街路写真データ(VSVD)を用いた公園利用実態の把握可能性	鄭な露・南宮護	
		明治神宮の視覚的表象は森なのか	水内佑輔・中村和彦				
	司会 武田 重昭 (大阪公立大学)				司会 石井 匡志 (アゴラ造園)		
10:40 ～ 12:10	研究・事例発表会 ③	災害多発地域における文化的景観の保全に関する研究	福田昌代・高野健人・秋田典子	研究・事例発表会 ④	大都市郊外の中小都市再生に向けた「サーキュラータウン」の提案とその意義	寺田 徹	
		民話・伝承に基づく人吉球磨地域における感性的自然認識に関する研究	呉峰瑛・劉経・中村和彦		静岡県富士市の再開発事業とウォークアブル事業における住民組織の参画と実証	後藤樹乃・町田怜子・竹内康・入江彰昭・茂木もも子	
		世界自然遺産小豆原における観光ガイドの認定制度に対する認識	武正憲・濱泰一・宮本万理子		米国のSchoolyard Park ProjectとEdible Schoolyard Projectにみる校庭改善の新たな方向性	飯山洋志	
		計画的行動理論に基づく国立公園関係地域の若者の観光就業意向の分析	汪慧心・古谷勝則		大阪北摂みどり庭園回廊構想とその実現化方策:令和の龍門瀑	都田徹・小林祐一・塚本悠一郎	
		日本の竹林管理活動の実態に関する研究―活動特性に着目した類型化―	水川裕紀子		アクションプラン:大阪北摂みどり庭園回廊構想作成への探求	塚本悠一郎・小林祐一・都田徹	
		太田市金山の植樹計画策定に向けた地域連携活動とその評価	塚田伸也・常見龍之介・森田智夫				
	司会 石川 啓貴 (国土交通省)				司会 西山 秀俊 (グラック)		

研究・事例発表会（ポスター発表）

2025 年度日本造園学会全国大会では、従来のポスターセッションに加え、口頭発表のセッションも設けた「研究・事例発表会」を開催します。この発表会は、造園・ランドスケープ分野に関わるあらゆる研究や実務に関する事例報告を、口頭・ポスターの両形式で発表し、専門性や産官学等の立場を超えて知見を共有し、造園学に関わる学生や専門家の幅広い交流を促すことを目的とするものです。

ポスター発表

日時：2025 年 5 月 17 日（土）9:00～18:00（コアタイム 16:30～17:30）

場所：東京大学安田講堂

A 造園学原論および造園史

01： ヴェルサイユ庭園におけるトピアリーの形態と庭園構成に果たす役割について

平岡直樹（南九州大学）

ヴェルサイユ庭園内に植栽されている約 1200 本のトピアリーの調査を行い、形態や配植の特徴を明らかにした。トピアリーは、主軸線上の大眺望の景観構成には大きく関与せず、宮殿を出て庭園の散策を行い、その帰路においてディテールを楽しむ場面でその魅力を発揮することを大きな役目として植栽されていることを指摘した。

02： 足利将軍 2 代義詮と 3 代義満の武家庭園における王朝文化の修得と発展

関西剛康（南九州大学大学院）

足利将軍 2 代義詮と 3 代義満が武家庭園を通じて王朝文化を発展させた過程を調査。その結果、義詮は公家階級との交流から庭園文化の基礎を築き、義満は永徳元年の後円融天皇の室町第行幸を実現。元享 4 年の北山第行幸を先例とする「三舟の才」を含む格式高い催しを通じ、王朝文化との融合を象徴する成果を示した。

03： 大阪山草倶楽部幹事 田中秀三郎の事績について

西村公宏（（株）高島テクノロジーセンター）

本発表では、昭和初期の大阪山草倶楽部の会誌等より、幹事であった田中秀三郎の事績をたどり、田中が実生より育てることで、市内においても大概の洋種高山植物は栽培可能であると主張したこと、ロックガーデンについても、自身の経験より、土質、材料、採光等に留意した回遊式のロックガーデンを提唱したこと等を指摘した。

B 造園材料・施工および管理

02： 茨城県を対象とした衛星データを活用した広域的な竹林分布図の作成

河田涼士（スターフィールド株式会社）・入江彰昭（東京農業大学）・井上和也（産業技術総合研究所）

我が国の竹林は拡大化とイソプレン発生源とされその対策が急務である。本研究では茨城県を対象に広域的に拡大した竹林分布を把握するため衛星データを用いた竹林分布図の作成を行った。作成された竹林分布図を現地踏査等で検証した結果、既存の植生図（第 6・7 回）よりも正確に竹林の位置情報と面積を取得することができた。

03： 宮城県における小学校に生育する巨樹・古木の利用と保全状況

日高英二（南九州大学）

宮城県内の小学校に対して校内に生育する巨樹・古木の現状についてアンケート調査を行った。回答のあった小学校の 7 割に巨樹・古木が現存しており、巨樹の活用は学校のシンボルや休憩所が多かった。巨樹を環境教育の教材としている小学校は少ないが、多くの学校で児童への影響は大きいと思われた。保護・保全活動は周辺の掃除程度で、大掛かりな対策をしている学校は少なかった。

04： 名勝涉成園におけるチョウ類群集と環境評価

後藤香奈・稲本雄太・太田陽介・鷺田悟志・和田貴子（植彌加藤造園株式会社）

・加藤友規（植彌加藤造園株式会社／京都芸術大学大学院）

名勝涉成園は都市部にくらす生物達の貴重な生息地となっている可能性が示唆されている。生物と庭園管理の視点からチョウ類に着目し 2020 年 8 月から 2023 年 7 月にかけて環境調査を行った。確認したチョウは 5 科 26 種 535 個体で

あり園内の様々な環境は市内の点在する緑地として役割を果たしている可能性がある」と示唆された。

05： 地域性在来植物ビオトープにおける動植物相の3年間のモニタリング報告

鈴木孝彦・大島佳保里・上柳燎平（戸田建設）

当ビオトープは、2018年11月に約200㎡（池約35㎡）を造成し、2021年に拡張。全体約500㎡、池約75㎡の規模です。植栽は、つくば市周辺の水田や樹林地から調達したシラカシやコナラなど、地域性在来植物のみで構成。地域の生物多様性の保全と景観形成を目指し、2か月に1度モニタリングを行い、今回は途中報告になります。

06： 婚礼施設におけるフラワーロスの利活用と社会との可能性

日比野龍真・入江彰昭（東京農業大学）

本研究では未だ明確にはなっていないフラワーロスの定義とその範囲を明らかにし、婚礼施設の花の利活用を明らかにした。フラワーロスとは花を採花し出荷する段階から最終的な使用用途に用いられる段階までに発生した使用されなかった花と定義され、婚礼で使用された花の利活用として地域社会との連携の可能性が示された。

07： ボタニカルライト(植物による発電)を用いた緑化植物の検討と防災利用の可能性

神山歩美・入江彰昭（東京農業大学）・大塚淳一（株式会社グリーンディスプレイ）

都市のグリーンインフラとしてボタニカルライトを用いた緑化植物の違いによる発電の違いや災害時の利用などの知見を得ることを目的とした。その結果、植物の種類（高木・低木・地被、落葉・常緑）によって電圧値に違いがあること、およそ半日で単三電池の充電が完了することが明らかになった。

08： UAVを活用した宿根草ガーデンの3次元記録方法の検討

牧田直子（南九州大学）・大隣昭作（福岡大学）

ナチュラルガーデンは宿根草や多年草を用い、長期的に維持管理することで四季の変化を楽しめるが、管理は管理者の力量に左右されやすく、記録方法も確立されていない。そこで本研究では、UAVを用いてガーデンの3次元モデル化を行い、他の管理方法と比較してそのメリット・デメリットを明らかにする。

09： 街路樹のグリーンインフラとしての多機能性の調査研究—主に雨水集水と熱環境改善に関して—

嵩下遼・入江彰昭（東京農業大学）・田崎一宏（前田道路株式会社）

本研究は街路樹のグリーンインフラとしての多機能性としてケヤキ H17mC2.0mW8.9m、モミジバフウ H10mC1.1mW3.7m、イチョウ H17mC0.7mW1.7mの雨量に対する樹幹流による雨水集水、樹木緑陰下における低減効果を明らかにし、雨水貯留材の植栽基盤への貯留溜水、熱環境改善を検討した。

10： 低浸透地におけるレインガーデンの雨水流出抑制効果の評価事例

向井一洋（竹中工務店技術研究所）・向山雅之・野間慎司（竹中工務店設計本部）
・尾崎昂嗣（アールアンドユー・レゾリューションズ）

傾斜地に位置する研修宿泊施設の敷地内に、貯留規模16m³のレインガーデン設置し、約8カ月の降雨量、流出・流入流量の計測結果より、レインガーデンの雨水流出抑制効果を評価した。浸透能が低い場所であったが、降雨強度80mm/hrの降雨に対して約20分の流出遅延、約50%のピーク流量低減等、一定の流出抑制効果が確認された。

11： 長居公園における雨水貯留材を用いた植栽基盤整備工法について

當内匡・野口よしの（株式会社庭樹園）・田崎一宏（前田道路株式会社）・入江彰昭（東京農業大学）

大阪市長居公園の改修工事にて、植栽した樹木が大きく健全に生育し、豊かな生態系サービスを提供するよう舗装の下に雨水貯留材を用いた植栽基盤を設けた（公共空間では日本初）。また、周辺の舗装を透水性舗装へ変更し冷却効果を高め、表面排水も植栽基盤に誘導し、都市洪水防止など幅広いグリーンインフラ機能をめざした。

12： 雨水貯留材を活用した植栽基盤改良技術の社会実装化について

田崎一宏（前田道路株式会社）・入江彰昭（東京農業大学）

都市樹木の根系保護材として路床の一部を樹脂製雨水貯留材で置き換える耐圧植栽基盤工法について、これまでの研究により樹木根系の成長促進が認められた。貯留材は軽量であり、人力・短時間施工のため迅速な交通開放も可能である。本工法の社会実装段階への移行にあたり、工程・費用を中心に具体的な事例を紹介する。

13： 現地施工を伴うガーデンショー出展と授業との関係について

山本聡・樋上啓子・尾田顕子・金原淳一・光成麻美（兵庫県立大学／兵庫県立淡路景観園芸学校）

ガーデンショーなどの花みどり関連イベントについて、授業を活用した出展をおこなう際の課題について検討した。デザイン面では、学生の指向性と社会のニーズのマッチングの重要性、期間が限定されるといった制約があることへの理解、施工面では、デザインと施工性との関係などが特に重要であると考えられた。

14： 杉並桃井原っぱ公園を事例とした樹林地の防火機能に関する調査研究

佐藤 健・入江彰昭（東京農業大学）

本研究は杉並区立桃井原っぱ公園の樹林地を対象に樹木の含水率を夏（6月）、秋（10月）に調査した結果、イチヨウやユズリハ、コブシの葉の含水率70%以上と高く、落葉樹は10月より6月が高く、常緑樹ではあまり変化がみられなかった。さらに葉の含水率からみた樹林地の防火機能を作成し、公園全体の防火性を評価した。

15： 富士山清掃登山におけるごみの現状と課題

遠藤拓郎・入江彰昭（東京農業大学）

本研究はごみ拾い SNS ピリカを用いた富士山清掃登山におけるごみの種類と分布を明らかにし、今後のごみ対策を考察した。7/26と9/8の富士宮口登山道上で1006個のごみが回収され、山小屋や元山小屋付近に過去ごみ類が多くみられた。登山用ストック類のごみが目立ち登山用金剛棒の使用が望ましいと考えられた。

16： 戦後80年XRを使った歴史探訪

公益財団法人東京公園協会公園事業部「防災公園グループ」・多摩部

多摩地区の都立公園には、先の大戦時の航空機に関する軍事施設や軍需工場の遺構を留める公園がある。東京都公園協会は、これらの公園を結び、戦争の歴史を地域と子ども達に伝えるイベントの開催等に取り組んでいる。戦後80年を契機に、XR技術を活用し携帯端末を通じて当時の様子を伝えるコンテンツを開発したので紹介する。

C 造園計画（庭園計画、公園計画、風景計画）

01： 国立公園管理計画から見た自然景観に支障のない色彩について

関根さとみ・黒田乃生（筑波大学）

本研究は国立公園における「景観に支障のない」工作物の色彩を明らかにすることを目的とする。日本の国立公園管理計画72件を分析し、環境省が自然景観に調和すると考える色彩の傾向を定量的に示した。自然素材の使用が最も多く、着色する場合は灰色、焦茶色、茶色等が推奨されていたことが明らかになった。

02： 京都市・梶井町における近代別邸群の形成と東山を望む風景計画に関する研究

竹田桃子・福井亘（京都府立大学大学院）

近世まで公家町であった上京区梶井町は、明治中期から昭和初期にかけて、実業家や宮家の別邸が築造された。空間の特徴としては、大文字山を含む、東山三十六峰を望むための座敷や庭園が設けられていたことが挙げられる。また、茶会や園遊会の開催といった、文化的な交流の場とされていたことが明らかとなった。

03： 浜離宮恩賜庭園における潮入りの操作に関する研究

日下田貴彦・竹内智子（千葉大学大学院）

浜離宮恩賜庭園の潮入りの池を対象に、最近10年の毎月の水質データおよび通年の作業日誌を整理・分析し、管理者にヒアリングを行った。その結果、水門操作は鑑賞価値の維持のために干潮時前後に集中していること、水門管理が体系化されていないこと、環境変化により潮入り機能の維持が困難になる可能性が明らかになった。

04： 東京都心市街地大規模再開発における高木植栽樹種の考察

中右麻衣子・清水一史・菊田宏志・鈴木章浩・山口博喜（森ビル株式会社）

森ビル株式会社は東京都港区で大規模な市街地再開発事業を進める中で、建物を高層に集約することで都市緑化に取り組んできた。1986年竣工のオークヒルズから、六本木ヒルズ、虎ノ門ヒルズ、2023年竣工の麻布台ヒルズまで、約40年間の再開発事業において採用した高木を通観することで、時代に応じた都市緑化の特色等を考察する。

05： 駅前広場における緑地のリノベーションに関する研究—リノベーション・神戸を対象として—

早川喬士・松尾薫・加我宏之・武田重昭（大阪公立大学）

神戸市の「リノベーション・神戸」プロジェクトを対象に、駅前広場における緑地の計画・設計のあり方を考察した。プランニング特性としては、車のための交通空間から歩行者のための歩行・交流空間への転換が進んでおり、デザイン特性では、緑地が持つ効果を最大限に発揮する植栽設計のあり方を明らかにした。

06： 北海道東部における自然草原の保全に向けた課題の整理

松島肇・徐夢林・佐藤舜紀・EeHung Khew・中山隆治・愛甲哲也・上田裕文・小林国之
・石黒侑介（北海道大学）

自然草原はその希少性にも関わらず保全が十分とは言えず、農地への転換や太陽光発電施設の設置による損失が懸念されている景観である。本報告では、保全に向けた課題と展望について整理し議論する。

07： 点群データを用いた3次元樹木モデル作成の試行

森岡千恵・金甫炫・飯塚康雄（国土交通省 国土技術政策総合研究所）

本研究は、公園緑地や樹木の計画や設計、施工、維持管理等に使用可能な3次元樹木モデル（ポリゴン）の作成手法

を検討することを目的として実施したモデルの作成手法は、既存樹木や圃場に植栽された樹木でも活用可能な簡便な手法とし、樹木の点群測量結果を用いて3次元樹木モデルの作成を試行した。

08: 樹木の成長データを用いた3次元樹木モデル作成の試行

飯塚康雄・金甫炫・森岡千恵(国土交通省 国土技術政策総合研究所)

本研究は、樹木の成長を踏まえた公園緑地の計画や樹木の計画、又は維持管理等へ活用が可能な3次元樹木モデルの作成手法を検討することを目的に実施した。樹木モデルの作成は、樹木の成長を表現するために樹木の成長データと樹木のイラスト図を用いることとし、簡便に作成可能な手法を検討した。

09: 泥団子づくり体験による感情の変化

山下惟(株式会社アイ工務店)・赤澤宏樹(兵庫県立大学)・川口将武(大阪産業大学)

本研究は、公園イベント来訪者を対象にしたアンケート調査から泥団子づくり体験前後での感情変化の分析を行った。その結果、感情状態尺度の平均評価点の得点差をみると、「親和」「非活動的快適」のポジティブ感情が大きく増加し、「敵意」のネガティブ感情が減少した。以上から泥団子づくりは体験者の心を癒す作用があり、環境教育や公園イベントプログラムとして可能性があるといえよう。

10: 都道府県による国定公園管理の実態と課題に関する研究－取組の把握と管理計画の分析を通じて－

濱久保衛・伊藤弘(筑波大学)

本研究では都道府県が独自に管理を行っている国定公園制度に着目し、その管理に関する取組の実態を把握することを目的とした。都道府県を対象に管理の取組状況や管理計画の策定状況を把握するためのアンケート調査を実施するとともに管理計画の分析を行い、国定公園管理の現状と課題を明らかにすることで今後の望ましい管理のあり方について考察した。

11: 公園におけるウェルビーイングの快適性の定量的把握について～砵公園を事例に～

窪田琉未・入江彰昭(東京農業大学)

本研究では公園利用者の景観特性と物理的要素、緑視率、WBGTによる暑さ指数、緑陰を明らかにし公園におけるウェルビーイングがもたらす快適性を定量的に把握し、その空間特性を明らかにした。その結果、砵公園における快適空間の特徴として樹林を背にし前面に眺望のよい開放的空間、いわゆる後山前水庭の空間であった。

12: 多年草植栽の公共花壇の変化と花期の比較

藤本美晴・竹内智子(千葉大学大学院)

本研究は、都市公園の花壇の植栽手法の違いによる利点と課題を明らかにすることを目的とする。代々木公園の多年草と一年草の花壇を対象に約2年間の定点観察と植栽図の作成、各管理者へのヒアリングを行い、植物の変遷や管理方法、コストを比較した。その結果、手法ごとのコストや必要な知識と技術、人員が明らかとなった。

13: 北海道北斗市トラピスト修道院における三木露風の文学作品からみたサウンドスケープの特徴

松田彩・大島卓(札幌市立大学大学院デザイン研究科)

北海道トラピスト修道院で文学講師をしていた三木露風の文学作品から当該地域の1920年代の音環境及びその認識を明らかにする。作品の分析結果から修道生活における「沈黙」によってもたらされた「静寂」の音環境と鳥の声や波の音、鐘の音が重なり合う豊かな環境音の応答が当該地域のサウンドスケープを形成してきたといえる。

14: 北海道大学札幌キャンパスにおける生態系サービスの評価

安達圭吾(北海道大学大学院農学院)・松島肇(北海道大学大学院農学研究院)

北海道大学札幌キャンパスにおいて緑地が提供する環境貢献や社会貢献を調査するため、キャンパス内緑地による生態系サービスの定量化を行った。方法は大きく3つに分けられ、i-Tree ECOとi-Tree Canopyを用いた樹木による生態系サービスの測定、地表面温度計測による温度低減効果の検証、利用者調査による文化的サービスの計測を実施した。

15: 環境問題を踏まえた東京都の小学校校庭の利用制限と対応策

寺田光成(日本体育大学)・ERMILOVA Mariia・鹿野晶子・野井真吾

本研究は、近年の暑熱環境の深刻化や都心への人口過密による児童数増加に伴う校庭利用制限の実態を明らかにすることを目的とした。東京都公立小学校1258校を対象にアンケート調査を実施し、439校(35%)から有効回答を得た。調査の結果、ほぼすべての学校がWBGT測定を実施し、8割以上が測定値に基づく校庭利用制限を行っていた。また3校に1校で著しい児童数増加がみられ、約3割の学校が休み時間の校庭利用を制限していることが明らかになった。

16: Heat-Related Schoolyard Restrictions in Tokyo Elementary Schools: Analysis of School Nurses' Measurements

ERMILOVA Mariia(日本体育大学)・寺田光成・鹿野晶子・野井真吾

This study aimed to clarify the current state of schoolyard use restrictions due to worsening summer heat conditions. We obtained WBGT data from the Japan Meteorological Agency to calculate time periods with high likelihood of usage

restrictions, and requested seven school nurses in neighboring schools in Setagaya Ward, Tokyo to record schoolyard use restrictions. Results showed that while there were similarities in regulations based on WBGT measurements across schools, decisions were ultimately made on a school-by-school basis.

17: 遺跡活用における遺構表示方法に関する調査研究—東京の遺跡公園整備事例を中心に

王軍（株式会社文化財保存計画）・矢作岳（千葉大学大学院園芸学研究院/風景芸術研究所）

遺跡における遺構はその姿や空間を地上に表示し、地域のシンボルや公園として活用され、遺構表示方法は遺存状況や立地環境によって様々工夫が行われている。本研究では、遺跡公園整備における遺構表示手法を体系的に整理することで、遺構表示手法の可能性と遺跡整備の質向上に資する資料を目指す。

18: 北海道大学で遊び場を開いてみたら ～「北大プレーパーク」からみる大学キャンパスの緑地活用の可能性と管理運営の課題～

北岡真吾・愛甲哲也（北海道大学）・寺坂崇（まなびデザイン）

北海道大学札幌キャンパス内の緑地「中央ローン」は、隣接地にこどものための図書館施設の開館を控え、管理運営の対応が求められる。中央ローンで開催したプレーパークを通し、半公共空間である大学キャンパスの緑地の管理運営の課題と、課題解決の先に見込まれる大学運営や地域・社会に対する価値創造の可能性を考察した。

19: Innovation for Inclusion : Study on Tactile Guide Book of Heritage Sites for Visually Impaired Visitors

Dyah Ayu Pangestuti・Nobu Kuroda（University of Tsukuba）

Ever since physical accessibility became mandatory in Japan in 1994, public buildings and museums have improved, with information accessibility follow through. However, heritage sites remain a challenge to navigate, especially for visually impaired visitors. While Braille and audio guides aid inclusivity, they often fail to convey a complete spatial and historical narrative. This study aims to analyze existing cases for developing a tactile book that enhances engagement through shapes and textures rather than relying solely on Braille. By combining tactile storytelling, the guide seeks to offer a more immersive, intuitive experience and encourage deeper connections between visually impaired visitors and heritage sites.

20: イベント実施によるオープンスペースの滞留状況の変容—品川セントラルガーデンを事例として—

高森万貴・相澤章仁（株式会社大林組）

イベント実施によってオープンスペースの滞留状況にどのような影響があるかを検証するため、品川セントラルガーデンを対象としてイベント前後の滞留状況を比較した。滞留者数は日常時より 3.8 倍に増加し、利用者層の多様化もみられた。イベント時に最も多く確認された滞留者の行動は会話であり、日常時より 6.9 倍に増加した。

21: 源氏物語における表現からみた鳥類の文化的価値の整理

岡未来・福井亘（京都府立大学大学院）・高林裕（神戸女学院大学）

鳥類は、音楽や美術、文学などを通して生態系サービスの一つである文化的サービスを提供してきた。鳥類の文化的価値を具体的に認識するために、文学作品における鳥類の表現に着目した。本研究では、平安時代の代表的な文学作品である源氏物語を対象とし、和歌に詠まれた鳥類と和歌以外に描写された鳥類の表現を整理した。

22: 八代集の和歌表現に見る鳴く虫の生息条件と鳴く虫に対する歌人の認識の分析

内田裕菜・福井亘（京都府立大学大学院）・高林裕（神戸女学院大学）

本研究では、鳴く虫への関心が高かった平安時代ごろの鳴く虫が詠まれた和歌の表現から、鳴く虫の生息条件を種別に分析し、鳴く虫に対する当時の認識を把握することを目的とする。鳴く虫の名称に関する文献調査を踏まえ、八代集の和歌を対象に現在の種との比較を行った。さらに種類ごとの生息条件や認識の違いを調査した。

23: Unlocking the Potential of Community Micro-Spaces: A Case Study from Changsha, China

Liao Yuhui（千葉大学）

This study explores how community micro-space interventions can address child development and social integration amid shrinking outdoor spaces and increasing community alienation due to rapid urbanization. Conducting an action study in Fengquangujing Community, Changsha, China, the research highlights children's active roles in garden creation and their impact on landscape quality and social connectivity. Findings suggest that community gardens serve as a platform for multi-stakeholder governance, with children as key catalysts in revitalizing communities. The paper identifies key elements for sustainable community micro-spaces and proposes strategies for institutionalizing children's participation and building long-term governance networks.

24: 笠間市における公園等適正配置計画策定に向けた検討事例

中口敬太（笠間市都市計画課）・小川芳朗・平林大河（東日本総合計画株式会社）・雨宮護（筑波大学）

笠間市においては、近年の人口減少、少子化、高齢化に伴い、公園利用者の減少や地域による管理の困難化、施設老朽化による維持管理費の増加といった課題が顕在化してきている。本計画は、地域のニーズに即した公園のあり方や適切な公園配置を定めるもので、検討中の適正配置の方針や公園等の評価方法について発表する。

D 都市および地方計画

01： 北熊本 SA リニューアル事業における造園工事について

金子武史・井上雅樹・新村祐太・柴田 知己（NEXCO 西日本）
・吉永浩一郎・石黒美穂（NEXCO 西日本エンジニアリング九州）

北熊本 SA の上り線を 2024 年 12 月 18 日、下り線が 2025 年 3 月 27 日にリニューアルオープンした。リニューアル事業は 1971 年の開通以降初めてであり、これまでの運用における課題を踏まえて全面的に改良を行った。本発表では、この事業の造園的観点について報告する。

02： 周辺環境から見た公園の評価における人流データの有用性：笠間市の公園等適正配置計画を事例に

河嶋由羽・雨宮護（筑波大学）

社会変化・ニーズ変化への対応のため、公園やその周辺環境の現状や課題を客観的に把握・分析する必要がある。本研究では、シミュレーションにより生成された人流データを用いて、公園周辺の滞在者数、就業状態、活動内容、年齢層の時間推移を把握した。その結果、公園ごとの特徴が見られ、データの有用性が示された。

03： 放置竹林対策における竹林オーナー制度の運用状況

小林大起（元金沢工業大学）・片桐由希子（金沢工業大学）

近年深刻化する放置竹林問題に対し、竹林オーナー制度の運用実態を分析した。制度は管理促進や市民参加に有効だが、劣化竹林の改善には限界があり、専門的支援と参加しやすい環境整備が今後の課題である。

04： グリーンインフラのポテンシャル評価と優先整備地域の推定

伊藤渚生（日建設計総合研究所）

2011 年から 2022 年にかけての土地利用の変化を分析し、グリーンインフラのポテンシャルが高い地域を特定するとともに、人口の増減を考慮することで、今後優先的にグリーンインフラを増進すべき地域を推定する。さらに、この情報をもとに、持続可能な都市・地域づくりに向けた方策を検討するための基礎資料とすることを目的とする。

05： 札幌の地域特性を踏まえたカフェ環境の分析とその活用方策に関する研究

小林雅果・大島卓（札幌市立大学大学院デザイン研究科）

札幌市のカフェを対象に、利用者の行為やニーズを調査・分析し、環境構成要素を整理した。カフェは単なる飲食の場を超え、多面的な広がりを持つことが明らかになった。特に光環境や地域特性など、屋内空間にとどまらない要素がカフェの構成に影響を与えており、利用者の快適性や滞在行動にも関わっていることが示唆された。

06： 宅地形成と植栽景観からみる琵琶湖疏水分線周辺環境について

磯部ひかり・福井亘・植地俊輔（京都府立大学）

琵琶湖疏水分線の白川水道沿いの植栽景観と周辺空間の形成過程を分析し、開発当時から現在に至るまでの宅地形成と植栽景観の関連性を明らかにした。また、植栽景観について現地調査の結果から GIS を用いた分析を行い、植栽の種類と分布を把握することで文献との整合性を確認することが出来た。

07： 千里ニュータウンの成熟・更新と地域コミュニティの持続性

西尾菜摘・轟慎一（滋賀県立大学）

近年、千里ニュータウンでは高齢化が進行している一方、子育て世帯の入居が見られる。街の変遷により地域とのつながりを今後いかに維持・継承していくのか、また、地域住民が地域コミュニティに関してどのような意識を持っているのか把握するため、地域活動に関する調査、コミュニティ空間の観察調査を行なった。

08： 東京都 23 区内の都市緑地に対する都民意識の実態把握

鷲見泰弘（東京都環境科学研究所）・横田樹広（東京都市大学）・上野裕介（石川県立大学）

都市緑地法の改正に伴い、都道府県レベルで緑の質と量を確保するための広域計画の策定が推進されている。一方、現代社会では人々が都市緑地に求める機能や価値観は多様化している。本調査では、東京都 23 区内在住の都民 5000 名を対象として、WEB アンケートにより、都市緑地に対する満足度などの意識を明らかにする。

09： 公園計画への BIM/CIM 導入に関する基礎的研究

金甫炫・飯塚康雄・森岡千恵（国土交通省 国土技術政策総合研究所）

本研究は、造園分野への BIM/CIM 導入の可能性やその際に必要な情報等を検討することを目的に実施した。そのため、小規模の公園モデル（簡易 3 次元モデル）の作成を試行するとともに、BIM/CIM を導入する際に必要な要素（オブジェクト）や主な属性情報、階層構造（オブジェクトツリー）等について検討を行った。

10： 死考と弔いを醸成する空間-かれたとて、いま-

来田玲子（札幌市立大学デザイン研究科博士前期課程）・大島卓（札幌市立大学）

近代の社会構造の変化や都市的なライフスタイルの拡がりの過程で、死の問題が大きくなっている。村が解体した日本社会において、いかにして弔いの持続性を取り戻すか。自身に必ず訪れる死とどう向き合い、いかにして生を豊かにするか。これらの問いに対して、社会学や民俗学の知見を参照し、未来における弔いの場を提案する。

11： 堺市の都市整備における百舌鳥古墳群の残存過程

村上侑眞・伊藤弘（筑波大学）

堺市においては、戦前・戦後を通じて、古墳の消失を伴いながら都市のインフラ整備が進められたことがわかった。古墳を保護することよりも交通インフラなど都市環境の効率性向上が優先であったことが考えられる。現在は、古墳の緑豊かな景観を意識した計画が策定され、風致公園などの整備が行われている。

12： 航空写真と深層学習を活用した街路樹の効率的なデータ把握方法の検討

榎本碧・増澤諭香・福島宏文（国立研究開発法人土木研究所寒地土木研究所）

街路樹管理では、樹木個別の状況把握が管理の質向上に不可欠である。しかし全国の道路管理者が管理する高木は100万本超に及び、橋梁など他の公物と比較しても毎木管理の実施は困難である。本研究では毎木管理の第一歩として、航空写真と深層学習を活用し、樹木の位置と樹冠の初期データを効率的に把握する方法を検討した。

13： 大都市住民による森林の利用状況 - 東京23区民が訪問する森林はどこにあるか？ -

小田龍聖・高山範理（森林総合研究所）・八巻一成（森林総合研究所 関西支所）

東京23区に居住する5000名を対象として、過去1年間の森林への訪問頻度および実際に訪問した場所についてのWEBアンケート調査を実施した。本報告では、回答者の約65%が一度も訪問しないという結果が得られた中で、それでも訪問者を集めた森林について報告する。

14： 自然が多い地域における自然体験の伝承行動の実行に関する規定因の検討

吉富瑠夏（一般財団法人公園財団）・高瀬唯（茨城大学農学部）

昨今、自然体験の減少を引き起こす「経験の消失」が問題となっている。解決策として自然体験の世代間伝承が挙げられる。本研究では、地域での自然体験の伝承の実行に関する規定因を明らかにするため、自然が多い地域で伝承経験がある市民12名へインタビューを実施し、グラウンデッド・セオリー・アプローチで分析を行った。

15： 近代以降の郡上八幡におけるまち変化と郡上おどりの継承に関する研究

永松明奈（株式会社リクルート）・伊藤弘（筑波大学）

本研究は、岐阜県郡上市八幡町における近代以降のまちの変化と、郡上おどり保存会設立以降の、郡上おどりの開催場所の関係を整理した。結果、まちの都市化及び観光地化、郡上おどりの観光化に伴って、複数の寺社や町中で行われていた異なる祭礼や行事が「郡上おどり」として統合・保存される一方、開催場所が同質化したことが明らかになった。

16： 平成期以降の東京湾における護岸形態に関する研究

越智楓・竹内智子（千葉大学大学院）

東京湾岸を対象に平成期以降の大規模開発の歴史的変遷を整理した。現地調査等により護岸形態を外観により分類、背後地の土地利用と水辺へのアクセス性を調査、護岸形態と高潮浸水想定区域図と重ねて分析した。その結果、平成期に親水性の高い護岸が増え、隅田川等のスーパー堤防が高潮対策に有用であることがわかった。

17： 京都と北九州におけるケヤキ街路樹の生育状況と生態系サービスに関する比較分析

植地俊輔・福井亘（京都府立大学大学院）・小宅由似（香川大学）

・水野晴之・野上一志・當内 匡・宇田川健太郎・本山圭一郎・安田卓宏（街路樹診断協会）

本研究では、京都市御池通と北九州市清張通におけるケヤキ街路樹を対象に、毎木調査により樹木サイズや生育状況を把握し、i-Tree Ecoを用いて生態系サービスを評価した。2都市間におけるケヤキの生育状況や生態系サービス評価値の違い、およびその影響要因を分析し、今後の街路樹管理に資する基礎的な知見を得た。

18： 人々の幸福度とグリーンインフラストラクチャーの関係に関する日本の研究動向

谷内翔太（茨城大学大学院農学研究科）・高瀬唯（茨城大学農学部）

近年、人々の幸福度を考慮した地域づくりが推進されているが、幸福度を指標としたGIの活用はあまり普及していない。幸福度を指標にするには、幸福度とGIの関係に関する知見を整理する必要があると考えた。したがって、本研究では、幸福度とGIの関係に関する日本の既往研究を対象としたスコーピング・レビューを実施した。

19： 歩道における住民参加型エディブル・ランドスケープの実践

江口亜維子・花里真道・岩崎寛（千葉大学）

筆者が代表を務める市民活動団体では、行政との連携により、歩道に設置されたプランターで、住民参加型のエディブル・ランドスケープを実践している。本発表では、参与観察により導入から実施までのプロセスを分析し、公共空間

におけるエディブル・ランドスケープの展開と地域のウェルビーイング向上への可能性を探る。

20: Park-PFI における収益施設の整備特性に関する研究 — 近畿圏の都市公園を対象に —

二宮稜太・松尾薫・加我宏之・武田重昭（大阪公立大学）

近畿圏の都市公園を対象に Park-PFI 制度運用の実態と現状を把握し、今後のあり方を考察した。本制度は公園の規模や種別に依らずに導入されており、財政面での貢献とともに維持管理・運営計画やその実施体制が重視されていた。収益施設は周辺環境との調和や整合が求められ、配置やデザインで建物と公園との一体感が確保されていた。

21: 制度と実態から捉える公園ボランティアの活動推進の可能性

今村麻菜美・松尾薫・加我宏之・武田重昭（大阪公立大学）

本研究では大阪府下の自治体を対象に公園ボランティアの制度内容と活動実態を把握し、その課題と可能性を探った。幅広い主体が参加することができる仕組みや花壇の手入れ等の魅力ある活動内容、近隣施設との連携によってボランティア活動の推進が期待できる一方で、技術支援の不足や市民の関心の薄さが課題となっている。

22: InfoWorks ICM を用いた石津川流域における雨水流出評価モデルの構築

北西愛・松尾薫・加我宏之・武田重昭（大阪公立大学）

本研究では、公園緑地系統を持つ泉北ニュータウンと良好な農地が保全される旧村地域を含む石津川流域における緑地を一体的に評価するため、InfoWorks ICM を用いて雨水流出評価モデルを構築した。外水氾濫を高い精度で再現できたが、ため池付近での溢水が多く、流域全体に浸水が見られるなど、モデルの課題も明らかになった。

23: 街区公園における住民主体の利活用に係る参加者・出店者の実態と意義

永田裕（熊本市都市政策研究所）・伊紋榮・石井裕子（一般財団法人公園財団公園管理運営研究所）

本研究では 10 年以上にわたり地域主体が地域連携しながら開催している「鳥井原公園 四ツ角マーケット」を調査研究対象として、参加者・マーケット出店者アンケートにより実態や認識を把握する。さらに既報や調査結果から得られた知見をもとに、地域における当該取組の意義を考察する。

E ランドスケープ・エコロジー

01: 野鳥生息地としての多摩地域二次林の環境に関する考察

崔麗華・國分優孝（東京都環境科学研究所気候変動・環境エネルギー研究科）

・高林裕（神戸女学院大学生命環境学部生命環境学科）・福井亘（京都府立大学大学院生命環境科学研究科）

東京都多摩地域の二次林 2 エリアで繁殖期の鳥類モニタリングを実施した。各エリアにそれぞれ 5 つの調査地点を設置し定点調査を行った。対象二次林およびその周辺環境の特性と鳥類の種数や個体数の関連性を分析し、二次林の鳥類多様性保全や希少種の生息地提供の役割を考察した。

02: 市街地路傍の石積み壁に生育する稀少な岩上生シダ植物の事例

村上健太郎（北海道教育大学函館校）

歴史的な建造物が残る市街地に残存する人工的な石積み壁に、キンモウワラビ及びヒメウラジロ（ともに絶滅危惧種；岩上生シダ植物）が生育していた事例について報告する。これらの種を生育可能にする環境要因の特定には至っていないが、中程度の攪乱がこれらの個体群維持に役立っている可能性がある。

03: レクリエーション利用される森林において植生区分と生育環境で細菌叢に差異はあるのか？

木村圭一・今藤夏子・土屋一彬・角谷拓（国立環境研究所）

森林の細菌叢はその生態系機能を担うのみならずヒトのアレルギー疾患にも影響する可能性が指摘されるため、ヒトの利用が見込まれる森林での細菌叢の把握はそうした多面的機能を理解する上で重要である。本研究ではレクリエーション利用される二次林および人工林の土壌、リター、大気に注目してこれらの細菌叢を比較した。

04: Spatial differentiation of urban thermal environments in climate vulnerable zones and equity in the distribution of summer shelter resources—the case of Sapporo, a coastal region in the sub-frigid zone

XU MENGLIN（北海道大学）・松島肇（北海道大学）

In the context of global warming, the spatio-temporal coupling of urbanization and extreme heat weather presents a dual challenge to urban thermal security, even affecting traditionally frigid and sub-frigid zones. This study examined the Sapporo region, a coastal city in the sub-frigid zone, to investigate the spatial differentiation mechanisms of the urban thermal environment and its relationship with the allocation of summer shelter resources. By integrating Landsat 8 remote sensing data, urban morphology parameters, and socio-demographic information, the research applied the Random Forest algorithm in conjunction with the SHAP model to reconstruct the spatial pattern of land surface temperatures, analyze the driving mechanisms, and explore the spatial relationship between the accessibility index of summer shelter facilities and heat exposure risk. These insights aim to optimize the spatial distribution of urban infrastructure, enhance urban climate

adaptation, and promote deeper alignment with the Sustainable Development Goals (SDGs).

- 05: The Current Status and Challenges of Food and Agriculture Experiences for Elementary School Students in Urban Agriculture Parks in the Tokyo Metropolitan Area

王茹詩 (Chongqing Jianzhu College)・柳井重人 (千葉大学)

This research examines the status and challenges of food and agriculture experiences for elementary students in urban agriculture parks in the Tokyo metropolitan area. Field surveys and one-hour interviews with managers at six parks reveal that, despite rich agricultural resources, programs for students are limited. Most parks offer only one to two annual harvest sessions for nearby schools, while a few provide full experiences from planting to tasting. The non-profit nature of these programs challenges budget balancing. Additionally, insufficient resources, limited manpower, and aging facilities restrict dedicated experience facilities and specialized programs.

- 06: 利根川河川堤防における改修履歴と埋土種子相の関係

小柳知代 (東京学芸大学)・山田晋 (東京農業大学)

全国的に消失が著しい半自然草原が成立する数少ない立地の1つである河川堤防には、改修履歴の違いによって様々な植生が成立している。本研究では、地上植生の種組成を左右しうる要因の1つである埋土種子相に着目し、改修履歴との関係を検証した。発芽試験の結果、改修された堤防では種数だけでなく個体数も少なく、草原性植物の供給源としての機能はほとんど無いことが分かった。

- 07: Virtual Bonds, Real Impact: How Reality Shows Drive Pro-Environmental Behavior Through Mediated Place Attachment and Social Identity.

任琬玥・木下剛 (千葉大学)

Reality shows are essential for raising environmental awareness and behavior. Grounded in the Stimulus-Organism-Response model, this study integrates Social Identity Theory and place attachment to examine how the program Become a Farmer fosters pro-environmental behaviors by strengthening viewers' social identity and mediated place attachment—a novel concept describing virtual emotional connections that transcend geographic boundaries. Structural Equation Modeling confirms that social identity and place attachment mediate the relationship between media stimuli and pro-environmental behavior response. This study demonstrates how reality shows convert environmental responsibility into behavior through virtual narratives, offering insights into the media's role in advancing environmental sustainability.

- 08: 「能登×GI復興」を考える研究会の立ち上げと今後の活動方針

上野裕介 (石川県立大学/能登SDGsラボ)・Kim Bohyun・森岡千恵 (国土技術政策総合研究所)

能登半島地震・豪雨からの復興を進める上で、能登の里山里海の現状把握とその管理・活用・保全に関する取組みが急務である。本地域の豊かな自然資本やGI/NbSを活用しつつ、災害に強く、安心安全で魅力的な能登地域を再生していくため、50名を超える産学官民金の有志による横断的かつ実践的な研究会を立ち上げ、活動している。

- 09: 野良猫の土地利用と人間の関わりから考える猫と人の共生

中山真里・ルプレヒトクリストフ (愛媛大学)

猫と人が共生可能な空間設計への示唆を提供することを目的とし、本研究では、野良猫の行動範囲が給餌場周辺の環境特性、土地の選好性、人との関わり(餌の量・回数、人数)によってどのように変化するかを調査する。さらに、行動範囲とランドスケープ特性(緑地、構造物、人間活動エリア)の関係性を分析する。

- 10: 衛星画像を用いた光害影響測定方法に関する基礎的な研究及び提案

石中洋平 (愛媛大学)・ルプレヒトクリストフ (愛媛大学)

都市化と照明普及で深刻化する光害は、生態系や健康への影響が懸念されている。地球規模での実態把握と定量的評価をより簡便に実施することが急務である。夜間衛星画像データと昆虫生息数データを統合解析し、光害の昆虫生息数に与える影響、経年変化を広域にわたり把握し、持続可能な社会への貢献を目指す。

F 情報処理・知覚

- 01: 自然音の聴取が電車混雑時におけるストレス緩和に与える効果

川口遥 (千葉大学)・岩崎寛 (千葉大学大学院園芸学研究院)

混雑した電車内における自然音の聴取が乗客のストレス緩和に与える効果の解明を目的とし、実証実験を行った。その結果、普段通り(自然音無し)で乗車時は、混雑率が増えるとストレスが増加するが、自然音聴取時はストレスが緩和され、混雑率150%以下の場合、乗車前と同様の状態を維持することがわかった。

- 02: 国史跡水城における UAV-LiDAR のファーストパルスを用いた林床点群密度と林冠被度の関係について

朝廣和夫 (九州大学)

本研究では地表面点群データの密度分布から調査区を選定し、現地での植生調査結果と照らし合わせることで地表面

点群密度と林床植生との関係を見出すことを目的とした。点群データ密度を算出し、ラスターデータを作成した後、選定した調査区で植生調査と相関分析を行った。結果、地表面点群と林冠被度に負の相関が確認できた。

03： 樹冠被覆率と人流データを組み合わせた都市構造評価

小野隆（公園からの健康づくりネット）・浦崎真一（大阪芸術大学）
・小栗大介・日高真吾（公園マネジメント研究所）・川口将武（大阪産業大学）

樹冠被覆率と人流データを組み合わせて、ウェルビーイングのための都市構造を分析する手法を開発した。都市において市民が緑に近接する程度を求められれば、その都市における緑への曝されやすさを数値化できる。これらの数値を用いて都市構造を評価することで戦略的な緑の配置等を検討することができる。

04： 画像認識 AI モデルを用いた緑地空間歩行時の印象評価に関する研究—明治神宮および代々木公園における事例
岩崎寛

大阪大学で開発された街路空間において連続的に「居心地の良さ」や「歩きやすさ」といった感情状態を評価する画像認識 AI モデル (AIHCE) を用いて、空間特性の異なる 2 か所の緑地 (明治神宮と代々木公園) での歩行時の印象について検証した。その結果、各緑地における歩行時の連続的な歩行時の変化が把握できた。

05： UAV により取得した樹木の NDVI と炭素固定量の関係性について

山崎雅治（東京農業大学大学院）・國井洋一（東京農業大学）

樹木の光合成による炭素固定化は、CO₂ を吸収して木材内部に固定化することで排出量を削減し、脱炭素社会実現に有効な手段である。本研究では、樹木の炭素固定量を定量的に把握することを目的とし、UAV により取得した NDVI と都市樹木の評価ツールである i-Tree Eco により算出した炭素固定量との関係性を考察した。

06： Deep Learning を用いた緑景観評価システムの構築

山森千紗・松尾薫・加我宏之・武田重昭（大阪公立大学）

Deep Learning を用いて緑の構図を分類するモデルを 3 種類の方法で設計した結果、ResNet50 を用いたものが最も高精度となった。また被験者実験によって緑の構図と緑視率の関係を捉えた結果、緑視率が高く中央型・両側型の構図である場合に評価が高くなった。これらの結果から緑景観評価システムの構築の可能性が示唆された。

07： 宿根草花壇における高性植物の 3 次元モデル作成について

大隣昭作・久保田倅生

写真測量では難しいとされる風に揺れる高性植物が使われた花壇の 3 次元モデルを作成する際、一般的な方法では風に揺れてモデル化出来ないことがある。そのような場合にも写真と動画を組み合わせることで迅速に 3 次元モデルの作成することが可能となる本研究ではその手順と 3 次元モデルの活用について検討した。

08： 道路防雪林の成長モデル作成に向けた樹木調査の解析

原田裕介・大宮哲・吉井昭博・榎本碧・松下拓樹（寒地土木研究所）

北海道の道路防雪林（植栽 1984～1994 年、列間 0.7～3.6m、苗間 0.8～6.6m）の樹木調査を 1994 年、2015 年、2024 年に実施した。アカエゾマツの樹齢に対し、樹高と胸高直径は比例関係、生枝高さは林内木と林縁木で変化傾向が異なり、樹冠閉塞後の枝張りや枯枝高さに比例関係はみられなかった。

09： 樹木に対する剪定シミュレーションの開発に向けた研究

渡辺大貴（東京農業大学大学院 地域環境科学研究科 造園学専攻）
・國井洋一（東京農業大学 地域環境科学部 造園科学科）

樹木剪定において、管理者と事業者間では目標樹形や剪定方法の共有が重要視されている。本研究では、剪定前後の樹形の変化を直感的に把握することを目的として、樹木に対する剪定シミュレーションの開発を行った。結果として、剪定作業を仮想空間上で繰り返し模索することが可能であると考察される。

企画展示

企画展示とは、「計画・実施作品、コンペ等応募作品の展示」、「求人募集、人材交流」、「地域におけるNPO 活動の紹介と支援募集」、「新商品・技術のプロモーション」など、企業団体から個人までの活動の発信や交流の場です。情報発信や意見交換、人材募集等の場として、ぜひご活用ください。

日時・場所：

2025 年 5月17日（土） 東京大学安田講堂

2025 年 5月18日（日） 東京大学農学部弥生講堂

出展団体（申込順）：

- ・ 株式会社 MOLTON
- ・ 一般社団法人日本庭園協会
- ・ 一般社団法人公園管理運営士会
- ・ 植彌加藤造園
- ・ 株式会社石勝エクステリア
- ・ NPO 法人みどり環境ネットワーク！
- ・ 一般社団法人日本造園建設業協会
- ・ 公益財団法人東京都公園協会
- ・ 株式会社日比谷アメニス
- ・ むつみ造園土木株式会社
- ・ 日産緑化株式会社
- ・ 教科書「図説わかる公園緑地計画」制作委員会
- ・ 一般財団法人日本緑化センター
- ・ 公益財団法人都市緑化機構
- ・ 有限会社橘地所・松葉舎・Guesuthouse Bed&dicycle・KOSAKUSITU
- ・ 前田道路株式会社
- ・ 中央大学研究開発機構
- ・ 全国 1 級造園施工管理技士の会（一造会）
- ・ 株式会社中村製作所
- ・ アゴラ造園株式会社
- ・ 一般社団法人ランドスケープコンサルタンツ協会

テーマ：「これからの学会を考える ～百の景を展望する～」

100周年の節目となる2025年度日本造園学会全国大会では、大会運営委員会と学術タスクフォースの共催によるミニシンポジウムを開催します。同シンポジウムでは、学会の刊行物、大会運営、取り組む事業の将来の方向性など、これまで学術タスクフォースが会員に意見を求め議論してきた経緯をふまえて、学会の今後のあり方についてより深く議論することを企図しています。会員の多くの皆様のご参加をお待ちしています。

日時：2025年5月18日（日）13:00～14:20

場所：東京大学弥生講堂（東京都文京区弥生1-1-1）

テーマ：「これからの学会を考える ～百の景を展望する～」

学術タスクフォースがこれまでに開催したフォーラムでは、学会の刊行物、大会運営、取り組む事業の将来の方向性について議論し、多くの意見やご提案を頂いた。頂いたご意見の一部は実装されたものの、多くはまだ検討段階にあり、こうした議論の場の設定そのものが会員相互の新たなコミュニケーションにむけた試行錯誤である。学会創設から100年目にあたる本年度は、本学会の各支部で活躍する若手に登壇いただき、地域で議論されている喫緊の社会課題について情報共有し、時代や社会の変化に対応した学会のあり方、地域から求められている学会の支援、役割について議論することを目的とする。とりわけ、学会の将来を担う中堅・若手会員、学生会員、学会の将来に意見をお持ちの会員にご参加いただきたい。また、当日は実質的な交流ができるよう活発な議論を促し、具体的な将来の景を展望したい。

プログラム：

1. 挨拶 大黒俊哉（大会運営委員長，東京大学）
2. 話題提供
 - （1）山本清龍（大会運営委員会，東京大学）：開催趣旨，社会課題への対応と学会
 - （2）赤澤宏樹（学術TF，兵庫県立大学）：学術タスクフォースでの議論と会員意見
3. 討論（コーディネーター：山本清龍）

登壇者 上田裕文（北海道支部，北海道大学大学）
佐々木竜太（東北支部，むつみ造園土木）
江尻（野田）晴美（関東支部，樹木医事務所）
大野暁彦（中部支部，名古屋市立大学）
岡田準人（関西支部，大阪産業大学）
高取千佳（九州支部，東京大学）

ミニフォーラム

【全体プログラム】

2025 年度日本造園学会全国大会の行事の一つとして、ミニフォーラムを開催いたします。これらのフォーラムは、造園関連諸団体（公益団体や企業団体）、地域の市民活動団体等との連携を図り、時節において重要かつ話題性に富んだ事項について自由に議論する場として設けたものです。会員諸氏をはじめ多くの皆様のご参加を期待しています。なお、詳しいプログラム内容に関しては、大会ウェブサイトのそれぞれのリンク先でご確認ください。各企画の所要時間は 1 時間 30 分です。

会場：第 1 会場～第 7 会場（農学部 1 号館）、弥生講堂一条ホール

■第 1 セッション：5 月 18 日（日）14:30～16:00

- ・ 「うたかた」と「まぼろし」の風景への眼差し ー名勝と自然現象ー <第 1 会場>
- ・ 公園の社会的価値向上のための管理運営指標の試み（その 3） <第 2 会場>
- ・ 持続可能な街路樹の管理に向けて <第 3 会場>
- ・ 災害からの復興と風景の役割・風景計画の役割 <第 4 会場>
- ・ GREEN × EXPO 2027 を語る ～その意義とランドスケープの挑戦～ <第 5 会場>
- ・ クマとのすみ分けの実現に向けて <第 6 会場>
- ・ 優良緑地確保計画認定制度(TSUNAG)における緑地の機能評価手法と今後の展望 <第 7 会場>
- ・ 公園樹木の創造的植栽管理について <弥生講堂一条ホール>

■第 2 セッション：5 月 18 日（日）16:15～17:45

- ・ 都市公園などの「公的な場」と「祭祀の場」との統合的マネジメントのあり方を探る <第 1 会場>
- ・ 江戸時代の臨海部における都市と水の関係 ー潮入りの庭園をめぐってー <第 2 会場>
- ・ 東京における 100 年間の生物相変化と回復への展望 <第 3 会場>
- ・ 全国 1 級施工管理技士の会主催、一造会大賞から造園施工分野 20 年の動向や流行を振り返る <第 4 会場>
- ・ 日本造園学会 100 周年記念誌〈作品編〉の編集活動から次の 100 年への手がかりを探る <第 5 会場>
- ・ 社会課題対応型都市公園機能向上促進事業からみるパークマネジメントの現在と可能性 <第 6 会場>
- ・ 国立公園で求められる利用者負担の展開 <第 7 会場>

【ミニフォーラム 開催概要】

2025 年 5 月 18 日（日）14:30～16:00

<第1会場>

■「うたかた」と「まぼろし」の風景への眼差し ―名勝と自然現象―

目的：人々に愛でられてきた自然の名勝地というと、絵画や写真などに表されてきたような、静的な風景が思い浮かべられるかもしれない。一方で、観賞者の風景体験からすると、演劇の舞台のように、特定の時間や条件のもと劇的に様子が変わるような動的な風景にも着目しなければならない。その動的な風景には、気象や海象などの自然現象により生じる、いわば「うたかた」と「まぼろし」の風景がある。人はときに人知を越えた自然の営力に畏れや美しさを感じるように、自然現象に対する人々の眼差しは、風景の価値を語る上で不可欠な視点であるといえる。

本フォーラムでは、自然現象により生じる「うたかた」と「まぼろし」の風景を、これまで人々がどのように捉え、どのように継承していくべきなのか、名勝の視座から議論を深めることを目的とする。

主な参加者と役割：

- 企画責任者 ・大平 和弘（兵庫県立大学）
 - ・浦崎 真一（大阪芸術大学）
 - ・井原 縁（奈良県立大学）
- 司会進行 ・浦崎 真一（大阪芸術大学）
- 話題提供 ・平澤 毅（文化庁）：名勝と自然現象
 - ・佐藤 真樹（魚津埋没林博物館）：魚津浦における蟹気楼への眼差し
 - ・井原 縁（奈良県立大学）：瀬戸内海におけるトンボロ現象と風景体験
- コメント ・大平 和弘（兵庫県立大学）

2025 年 5 月 18 日（日）14:30～16:00

<第2会場>

■公園の社会的価値向上のための管理運営指標の試み（その3）

目的：これからの公園の管理運営には、居心地が良く歩きたくなるまちなかづくりへ貢献し、新型コロナウイルスを踏まえたニューノーマル社会に対応し、心豊かな暮らし（Well-being）の向上に資することが求められている。千葉大学と日比谷アメニス共同研究の中で、ワールドアーバンパークス（WUP）が公表している 12 のウェルビーイングに関連した指標に着目して、公園の社会的価値向上に必要な取り組みとそれを測る指標の試案を作成し、いくつかの公園でトライアルを行った。この指標については、過去2回実施したミニフォーラムで様々な角度から議論をしてきたが、今回は、これまでの論点の流れを整理しながら、特に自治体の役割と、指定管理者とのつながりをどのように作っていくことができるかを中心に、公園の価値を高める取り組みとその評価のあり方について探っていく。

主な参加者と役割：

- 司会進行 ・上杉 哲郎（株式会社日比谷アメニス）
- 話題提供 1 ・竹内 智子（千葉大学）

都市公園の利用行動調査を踏まえた社会的価値からみた指標づくり（仮）

○話題提供 2 ・橘 俊光（公園管理運営士会）

公園の価値を高める取組みとその評価のあり方について（仮）

○話題提供 3 ・上杉 哲郎（株式会社日比谷アメニス）

公園の社会的価値からみた管理運営指標（試案）のトライアル結果（仮）

○コメンテーター（調整中）

・岩崎 寛（千葉大学）

・小川 貴裕（日建設計総合研究所）

・林 まゆみ（みどり・人・まち研究所／兵庫県立大学元教授）

・荒金 恵太（復興庁宮城復興局）

連携する団体：一般社団法人パークマネジメント協会他

2025 年 5 月 18 日（日）14:30～16:00

<第3会場>

■持続可能な街路樹の管理に向けて

目的：我が国における街路樹文化は古より存在していたが、近代街路樹として植栽が街中に導入されてから 100 年以上が経過した。長い時間を経過した街の街路樹は都市基盤整備を中心として、昭和から平成にかけての環境基準、都市景観として植栽されたものが多い。長い時間を経て培ってきた街路樹植栽の現在の状況を見ると、街の品格や文化への醸成には程遠い街路樹が多くみられ、街路樹の管理についても残念ながら不健全な街路樹が多くみられる。街路樹は、適切に管理されることで、街の景観向上、人への健康に対する寄与、生物多様性の向上など良好な点が様々見られるが反対の点も多くある。例えば、大径木化や落枝による安全性の問題、落葉による住民負担や苦情、管理が出来ていないことでの不健全な樹木状況など諸問題が存在する。さらに、管理に関わる運営費も年々かさばることから、街路樹其のものを伐採し、無味乾燥な街路空間になっている通りも散見される。

そこで 2025 年のミニフォーラムでは、街の文化や潤いといったものに寄与する街路樹を考える中で、今後求めるべき持続可能な管理をどう進めていくべきなのか、先進性の高い東京都の街路樹を事例に議論したい。

主な参加者と役割：

○趣旨説明 ・川口 将武（大阪産業大学）

○話題提供 ・菊地 孝一（東京都江戸川区環境部公園整備課）

「江戸川区における街路樹の取り組みと課題 －「根上がり」の原因となる根の状況－」

○コメント ・濱野 周泰（元東京農業大学教授/NPO 法人花と緑のまち三鷹創造協会）

○ディスカッション 話題提供者、パネリスト、会場参加者によるディスカッション

○パネリスト ・濱野 周泰（元東京農業大学教授/NPO 法人花と緑のまち三鷹創造協会）

・福井 亘（京都府立大学）

○コーディネーター ・石井 匡志（アゴラ造園株式会社）

連携する団体：街路樹研究推進委員会

2025 年 5 月 18 日（日）14:30～16:00

<第 4 会場>

■災害からの復興と風景の役割・風景計画の役割

目的：風景は、目に見える有形の地物だけではなく、その背後にある自然環境や人、地域の歴史や文化、産業やそれらのはたらき及び動態を含んでいる。そのため、自然災害などの被災地において、風景の復興は、建築物やオープンスペースなど物的要素の復旧だけでなく、人やコミュニティの活動を含めた場所のあらゆる要素をその連続性や一体性ととともに緻密に復興していくことに他ならない。

石川県の能登半島は、2024 年 1 月に発生した令和 6 年能登半島地震の被災地となり、復興の最中にある同年 9 月には豪雨にも見舞われた。復旧の長期化に伴う人口減少の加速化が想定される中、被災地の現場の声が届きづらい状況で、風景と風景計画は、能登をはじめ今後各地で起こるであろう自然災害からの復興に、どのように貢献しうるのか。2025 年のミニフォーラムでは、過去の被災地における復興過程をミクロな視点で紐解き、その中での風景および風景計画の役割を議論したい。

主な参加者と役割：

（1）町田 怜子（東京農業大学）

阿蘇地域における熊本地震からの復興過程と能登半島の現状紹介

（2）上原 三知（信州大学）

東日本大震災の被災地の復興計画と実際

（3）栗田 英治（農研機構）

東日本大震災および新潟中越地震における農村の復旧と復興

連携する団体：日本造園学会風景計画研究推進委員会

2025 年 5 月 18 日（日）14:30～16:00

<第 5 会場>

■GREEN × EXPO 2027 を語る ～その意義とランドスケープの挑戦～

目的：横浜市上瀬谷において、日本では大阪花博以来 37 年ぶりの A1 クラスの国際園芸博覧会が GREEN × EXPO 2027 が開催される。現地では、横浜市の区画整理事業や公園事業が行われており、また博覧会協会としても出展の公募を終え、協賛や市民参加などの参加を呼び掛けているが、まだその趣旨や内容について会員に広く理解されているとはいえない状況にある。同じ万博である大阪・関西万博がまさに全国大会の会期中に開催されており、万博に対して世の中の注目度が大きく高まると予想される中で、改めて GREEN × EXPO の目的、意義について再確認し、1960 年にオランダから始まった国際園芸博の系譜も踏まえ、現在リアルで国際園芸博を行う意味は何か？それも日本で、横浜で、上瀬谷でなぜ行う

のか？またこの会場計画において、どのようなランドスケープ分野での取り組みが行われているか？等について、当事者や関係者により議論する。

主な参加者と役割：

【国際園芸博覧会の目的や意義】

- ・湯澤 将憲（国土交通省参事官）
- ・山田 拓広（日本造園建設業協会）
- ・脇坂 隆一（2027 年国際園芸博覧会協会 推進戦略室長）

【GREEN × EXPO 2027 のランドスケープ】

- ・篠沢 健太（工学院大学 GREEN × EXPO ラボ ランドスケープディレクター）
- ・森口 俊宏（2027 年国際園芸博覧会協会 整備部長）
- ・奥山 伊作（ブレック研究所）

【博覧会レガシーとしての公園とまちづくり】

- ・長谷川正英（横浜市役所）

○コーディネーター

- ・秋田 典子（千葉大学）

連携する団体：国土交通省、横浜市役所、公益社団法人 2027 年国際園芸博覧会協会、一般社団法人日本造園建設業協会 等

2025 年 5 月 18 日（日）14:30～16:00

<第 6 会場>

■クマとのすみ分けの実現に向けて

目的：令和 5 年秋に東北地方を中心にクマ類の人里への出没が相次ぎ、人身被害者が過去最多に達したことは記憶に新しい。クマ類の分布域は拡大傾向にあり、人間の生活圏にクマ類が侵入し、安全・安心な日々の暮らしを脅かしている。こうした状況を受けて、環境省が設置した専門家検討会が「クマ類による被害防止に向けた対策方針」（令和 6 年 2 月）をまとめ、クマとの軋轢の低減に向けた人とクマのすみ分けの推進を強く打ち出した。かつての先人は鳥獣被害への対応として地域の総力をあげて「しし垣」を築き生活を守ったと言われるが、中山間地域での人の活力が低下する中で、現代の「しし垣」となる“すみ分け”を地域にあるアイデア・ツール・資源を活用してどのように実現すべきか、地域の空間計画の観点から議論する。

主な参加者と役割：

○趣旨説明・クマを巡る現状報告

- ・中澤 圭一 ・奥野 真木保（環境省） ・小林 喬子（自然環境研究センター）

○環境史から見たすみ分け

- ・三浦 慎吾（自然環境研究センター理事長）

○すみ分けの実現に向けて ～現場からの報告～

- 報告 1 ・横山 真弓（兵庫県立大学）
- 報告 2 ・近藤 麻実（秋田県自然保護課）
- 報告 3 ・福島 良樹（岩手県大槌町）
- 総括 ・山崎 晃司（東京農業大学）

○討論 報告者及び会場参加者によるディスカッション

連携する団体：環境省，自然環境研究センター，東京農業大学，兵庫県立大学，秋田県，岩手県大槌町

2025 年 5 月 18 日（日）14:30～16:00

<第 7 会場>

■優良緑地確保計画認定制度（TSUNAG）における緑地の機能評価手法と今後の展望

目的：「都市緑地法等の一部を改正する法律」（令和 6 年 11 月施行）に基づき，令和 6 年 11 月より「優良緑地確保計画認定制度（TSUNAG）」の運用が開始された。本制度は，グリーンインフラとして多様な機能を有する都市緑地の質・量の確保を一層推進することを目指して，民間事業者等による良質な緑地確保の取組を，国土交通大臣が気候変動対策・生物多様性の確保・Well-Being の向上等の観点から評価・認定する制度である。

本ミニフォーラムでは，本制度の構築に関わったコンサルタントからの話題提供を中心に，緑地の有する機能を評価するにあたっての実務的な検討内容や制度に反映する上での工夫，今後の学術的な課題などについての議論を行う。また，本制度で示した緑地の機能評価手法が，いかに今後の都市緑地の質・量の確保につながりうるのか，そのためにどのような活用方法が考えられるのか，今後の展望についても議論したい。

主な参加者と役割：

○趣旨説明

- ・小笠原 奨悟（パシフィックコンサルタンツ株式会社）

○話題提供

- ・酒井 翔平（国土交通省都市局都市環境課）：優良緑地確保計画認定制度（TSUNAG）の概要
- ・小笠原奨悟（パシフィックコンサルタンツ株式会社）：気候変動対策
- ・増澤 直（エコアセット・コンソーシアム/ 株式会社地域環境計画）：生物多様性の確保
- ・福塚 祐子（三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング）：Well-being の向上

○コメンテーター

- ・村上 暁信（筑波大学/SIP 第 3 期「魅力的な国土・都市・地域づくりを評価するグリーンインフラに関する省庁連携基盤」研究開発責任者）

○総評

- ・柳井 重人（千葉大学）

連携する団体：国土交通省都市局都市環境課

■公園樹木の創造的植栽管理について

目的：今回のミニフォーラムでは、造園技術のコア技術である植栽技術の総合化及び高度化を目指し、特に都市における公共緑化施設の代表である都市公園における公園樹木を主な対象として、その特性を踏まえて現状と問題と課題を整理し、都市市民の生活ニーズに応え、安全・安心で風格ある公園樹木とその空間について今後のあり方を示すとともに、これを実現化するための植栽技術について検討することを目的とする。特に、日本造園建設業協会では、新たに「緑地樹木剪定士」という資格を創設し、その運用を進めていることから、両者で標記課題の解決に向けた検討を進め、広く一般の方々と共に、考える機会としたい。

主な参加者と役割：

○趣旨説明：光益 尚登（CLA 公園樹木長寿命化技術研究特別委員会委員長）

○話題提供①「国営昭和記念公園におけるウォークスロー型樹木管理について」

：高橋 和嗣（株式会社 UR リンケージ、CLA 公園樹木長寿命化技術研究特別委員会ワーキングチーム）

○話題提供②「公園樹木の創造的植栽管理技術指針（案）について」

：丸山 英幸（株式会社愛植物設計事務所、CLA 公園樹木長寿命化技術研究特別委員会ワーキングチームリーダー）

○話題提供③：「緑地樹木剪定士について」

：調整中（一般社団法人日本造園建設業協会）

○コーディネーター：狩谷 達之（CLA 事務局長）

連携する団体：一般社団法人ランドスケープコンサルタンツ協会（CLA）、一般社団法人日本造園建設業協会

■都市公園などの「公的な場」と「祭祀の場」との統合的マネジメントのあり方を探る

目的：地域社会を健全な状態で存続させるには、住民による多様な地域活動が活発に展開されていることが必要である。これまで、都市公園などの「公的な場」や「祭祀の場」は、それぞれ地域への愛着や地域再生の場として機能してきた。しかしながら、人口減少や少子高齢化などにより地域活動も変化あるいは衰退化しており、より多様な地域活動を支える新たな場のあり方を探ることが課題といえる。

そこで本ミニフォーラムでは、地域再生における都市公園などの「公的な場」と「祭祀の場」との関係や役割を明らかにし、両者の統合的なマネジメント手法について議論することを目的とする。

主な参加者と役割：

○コーディネーター

・上甫木昭春（公益財団法人兵庫丹波の森協会 丹波の森研究所特任研究員/ 大阪府立大学 名誉教授）

○話題提供

- ・大平 和弘（兵庫県立大学自然・環境科学研究所）
- ・上田 萌子（大阪公立大学院農学研究科）
- ・押田 佳子（日本大学理工学部）
- ・角野 幸博（関西学院大学名誉教授）

○コメンテーター

- ・糸谷 正俊（公園マネジメント研究所経営顧問，社叢学会顧問）

連携する団体：公園マネジメント研究所

2025 年 5 月 18 日（日）16:15～17:45

<第2会場>

■江戸時代の臨海部における都市と水の関係 ―潮入りの庭園をめぐる―

目的：庭園研究会では，東京臨海部の潮入りの庭園について，その価値を広め，現代の都市デザインに活かすため，実践的な調査・研究活動を行ってきた。東京湾岸には，江戸時代から明治の初めごろまで海の自然を取り入れた多くの潮入りの庭園があった。これらは特別なものではなく，生活用水の確保，舟遊び等のレクリエーション，接待の場，舟運を前提とした物流拠点，外国船からの防衛など，個人の庭から將軍の大きな庭まで，多様な都市機能を担っていたと考えられる。近代以降の埋め立て事業や都市開発により潮入りの機能は喪失し，主要交通が船から自動車へと転換，現代は，水に対する人の感覚や意識も江戸とは大きく変わり，それに伴い潮入りの庭園の意義や役割も変貌していると考えられる。

本フォーラムでは，江戸時代の東京湾岸における水の使い方について，歴史・考古学的な視点からの話題提供を元に議論を進める。また，参加者に3Dモデルで過去の海と潮入り庭園を体験してもらう。これまでの造園学とは異なるアプローチを踏まえ，江戸時代の都市における潮入り庭園の意義と役割を浮き彫りにし，現代における新たな庭園を活かした「文化財庭園都市」のあり方について，議論・意見交換することを目的とする。

主な参加者と役割：

○企画・運営

- ・竹内 智子（千葉大学）：趣旨説明・司会進行

○話題提供（仮題）

- ・後藤 宏樹（東京都立大学プレミアムカレッジ）：上水と江戸の大名庭園
- ・Tamir Erdembileg（千葉大学竹内研究室）：3Dモデルによる潮入りの復元
- ・樋渡 達也（武蔵野文化協会）：「潮入りの池」は，東京の海に何をメッセージとして発信するのか

○コメント

- ・北村 葉子（東京都公園協会）
- ・菊池 正芳（東京都慰霊協会）
- ・平澤 毅（文化庁）

○ディスカッション

○総評

- ・ 亀山 章（東京農工大学名誉教授）

連携する団体：千葉大学，公益財団法人東京都公園協会，武蔵野文化協会，文化庁

2025 年 5 月 18 日（日）16:15～17:45

<第3会場>

■東京における 100 年間の生物相変化と回復への展望

目的：今日，生物多様性の保全と回復は，環境政策の最重要課題となっている。また，今大会は造園学会設立 100 周年の記念大会である。そこで本ミニフォーラムでは，学会の周年行事と同期させる形で，東京におけるこの 100 年間の生物相の変化を，ランドスケープの変化と関連付けて議論することとする。全体としては都市化に伴って生物相は著しく劣化し，生物多様性が毀損されてきたが，部分的には緑化や自然再生によって生物相の維持や回復が図られた場所がある。実証的データにもとづきながら，過去 100 年に起きた事象を把握するとともに，近未来，さらに 100 年先を見据えた生物多様性回復の展望について論じたい。

主な参加者と役割：

- ・ 八色 宏昌（生態工学研究推進委員会／景域計画株式会社）

○基調講演

- ・ 須田 真一（昆虫学者）：東京の昆虫相この 100 年

○話題提供

・ 日置 佳之（生態工学研究推進委員会／鳥取大学）：「武蔵野」に記録された昭和 10 年代の東京西郊の景観と生物相

・ 濱野 周泰（特定非営利活動法人 花と緑のまち三鷹創造協会）：明治神宮の樹林発達に伴う植物相の変化

- ・ 内山 香（東京都環境局自然環境部計画課）：東京都の生物多様性地域戦略と生物相回復関連施策

○ディスカッション 基調講演者，話題提供者，コメンテーター，会場参加者によるディスカッション

○コメンテーター ・ 趙 賢一（生態工学研究推進委員会／株式会社愛植物設計事務所）

○コーディネーター ・ 大澤 啓志（生態工学研究推進委員会／日本大学）

連携する団体：生態工学研究推進委員会

2025 年 5 月 18 日（日）16:15～17:45

<第4会場>

■全国 1 級施工管理技士の会主催，一造会大賞から造園施工分野 20 年の動向や流行を振り返る

目的：全国 1 級施工管理技士の会が主催する一造会大賞は 2025 年で 20 回目となる。一造会大賞受賞作品は，社会的な話題性，竣工までの物語，現場代理人の知恵や技量などが詰まっている。最初にこれまで

19 件の大賞をはじめとする受賞作品から、造園施工分野 20 年の動向や流行を振り返る。次に、戦後、高度経済成長期、バブル経済期に蓄積された造園空間はこの先どのように管理すべきか、ベテランと若手を登壇者として、造園施工分野の「これまで」と「これから」について聖域なき討議をおこなう。

主な参加者と役割：

- 話題提供① ・高瀬 直也（株式会社日比谷アメニス）
- 話題提供② ・坂田 摩耶（東光園緑化株式会社）
- 討論会
 コーディネーター ・石井 匡志（一造会幹事長・アゴラ造園株式会社）
 話題提供 2 名に加えて
 登壇者① ・南波 拓哉（一造会会長・株式会社昭和造園）
 登壇者② ・藤本加奈子（一造会副会長・箱根植木株式会社）
- 総括 ・荻野 淳司（一造会フェロー）

連携する団体：全国 1 級造園施工管理技士の会

2025 年 5 月 18 日（日）16:15～17:45

<第 5 会場>

■日本造園学会 100 周年記念誌〈作品編〉の編集活動から次の 100 年への手がかりを探る

目的：日本造園学会は創設 100 周年の記念誌の出版を予定している。そのうち〈作品編〉は、造園学会賞を受賞した設計作品やランドスケープ作品選集の掲載作品など、学会における『作品』に注目して、これまでの 100 年を振り返り、これからを展望することを目的としている。

これまで有志の若手参加者（非会員も含む）と共に、インタビュー対象の選定ワークショップから、学会賞受賞 17 作品へのインタビューとその記録の整理・編集を行ってきた。

本ミニフォーラムでは、インタビューの概要を報告すると共に、活動を通じて得られた、今日の日本造園学会・ランドスケープアーキテクトへの期待や、今後の視座となる「先人たちのメッセージ」の一部を共有し、インタビューに参加したメンバーとのディスカッションを通じて、私たち自身が次の 100 年を歩む手がかりを模索する。

主な参加者と役割：

- 趣旨説明・司会
 ・岸 孝（フリーランス、100 周年記念誌 作品編集委員）
- インタビュー成果の報告
 インタビュー 17 作品の紹介と共通質問（恩師からのバトン）などからインタビューを振り返る
 ・井野 貴文（グラック、100 周年記念誌 作品編集委員）
 ・片木 孝子（スタジオテロワール、100 周年記念誌 作品編集委員）
 ・岸 孝（フリーランス、100 周年記念誌 作品編集委員）
 ・有志インタビューメンバー（複数名参加予定）

○ディスカッション ・上記登壇者

○まとめ

・篠沢 健太（工学院大学，100 周年記念誌 作品編集委員長）

連携する団体： Alternative Landscape（造園学会 100 周年記念事業出版部会 若手交流の会）

2025 年 5 月 18 日（日）16:15～17:45

<第 6 会場>

■社会課題対応型都市公園機能向上促進事業からみるパークマネジメントの現在と可能性

目的：社会の変化に伴い，都市公園には社会課題への新たな対応が求められている。国土交通省が示す都市公園のストック効果として①防災性向上②環境維持・改善③健康・レクリエーション空間提供④景観形成⑤文化伝承⑥子育て・教育⑦コミュニティ形成⑧観光振興⑨経済活性化があるが，これらを発現させる施策である社会課題対応型都市公園機能向上促進事業では，特に「ユニバーサルデザイン化」「感染症対策（2022 年まで）」「ストック効果の向上」「DX の活用」「Park-PPP（官民連携による総合的な整備・管理運営）」がテーマとなっている。2022 年度から 3 ヶ年の蓄積があり，全国の自治体が目指している状況がみえつつある。

本ミニフォーラムでは，本事業を理解し，活用事例集等を概観することを通して，今後のパークマネジメントの方向性について考える。

主な参加者と役割：

○趣旨説明

・西山 秀俊（株式会社グラック）

○話題提供

「社会課題対応型都市公園機能向上促進事業の主旨と傾向」

・石川 啓貴（国土交通省）

○意見交換

○パネリスト

・石川 啓貴（国土交通省）

・藤田真由美（公園財団）

・赤澤 宏樹（兵庫県立大学）

○コーディネーター

・入江 彰昭（東京農業大学）

○質問対応

・稲熊 高子（株式会社ヘッズ）

■国立公園で求められる利用者負担の展開

目的：国立公園では、様々な形で利用者に管理のための経費や労力の提供をもとめる事例が増えてきている。気候変動などによる自然環境への影響とその保全、利用の多様化やインバウンドの増加で求められるオーバーユース対策、上質な利用環境や体験の提供を充実させるための多様な財源の確保や利用者の参加が期待されている。有料化は、一定の区域への立入や施設利用への協力金を求めるものから、駐車場や施設利用に対する協力金、ツアーやサービスの料金の一部の還元、ふるさと納税の活用など様々な事例が全国の国立公園で展開されている。有料化によって保護や管理の資金を得るとともに、利用者とのコミュニケーションの機会にもなるなどメリットも多くあるが、公平で透明性の高い仕組み作りも求められる。本ミニフォーラムでは、国内における有料化の事例や課題を共有し、今後の仕組み作りのあり方について参加者も含めて議論を行う。

主な参加者と役割：

○話題提供者

- ・ 知識 寛之（環境省自然環境局国立公園課）
- ・ 井上 義景（富士山太子館）
- ・ 愛甲 哲也（北海道大学大学院農学研究院教授）

○コーディネーター

- ・ 山本 清龍（東京大学，コーディネーター）

○コメンテーター

- ・ 下村 彰男（東京大学名誉教授，國學院大學教授）
- ・ 土屋 俊幸（東京農工大学名誉教授，日本自然保護協会理事長）
- ・ 寺崎 竜雄（静岡県立大学講師）

連携する団体：自然公園研究会

家族子ども企画（２）

家族で学会に行こう！

家族子ども企画の一環として、造園学会の強みである、「自然」そのものや、「自然と人との関わり」を見つめる視点を活かし、学会員の家族やキャンパスの近隣の子どもたちが参加可能な自然体験プログラムを実施します。

■自然体験プログラム

研究発表会やミニフォーラム等の時間帯にお子さまが参加できる自然体験プログラムを実施します。

日時：５月１８日（日）１０：００～１４：３０

場所：農学部弥生講堂アネックス前

- | | |
|--------------------------|-----------------------|
| ・ 移動式冒険遊び場 | 【協力】NPO 法人 プレーパークせたがや |
| ・ 自然観察スケッチ教室 | 【協力】Mariia Ermilova氏 |
| ・ キッズレンジャー体験（キャンパスの自然観察） | 【協力】NPO 法人NPO birth |
| ・ ツリークライミング®体験会 | 【協力】全国１級造園施工管理技士の会 |
- ※雨天中止

■特別公開フォーラム「ランドスケープ×子ども」

子どもの外遊び・自然体験等、グリーンタイム減少が社会的な課題になっています。今後のランドスケープ分野では、子どもを対象にどのような研究や実践を推進していくべきなのか。研究者、実践者、子育て世代など様々なステイクホルダーが集まり、前半での話題提供を踏まえて、後半ではワールドカフェ形式で議論します。※ 小さなお子さまもご参加いただけます。

日時：５月１８日（日）１４：３０～１７：００

場所：農学部弥生講堂アネックス・セイホクギャラリー

スケジュール：

家族・子ども参加企画「家族で学会にいこう！」の趣旨と活動団体紹介 飯田晶子（東京大学）ほか協力団体（１５分）

前半：ランドスケープと子ども～これまでとこれから～（６０分/各１０分）

- ・ 趣旨説明：「ランドスケープと子ども」寺田光成（日本体育大学）
- ・ 「公園と子ども」嶽山洋志（兵庫県立大学）
- ・ 「園庭・校庭と子ども」仙田考（田園調布大学）
- ・ 「地域と子ども」椎野亜紀夫（札幌市立大学）

- ・ 「環境教育と子ども」三島孔明（千葉大学）
- ・ 「農と子ども」別所あかね（東京大学）

後半：ワールドカフェ 担当：村松亜希子（株）生態計画研究所）（60 分）



東大 キャンパスで 自然を体験 しよう!

参加無料
要事前申込

5月17日(土)正午締切
定員になり次第受付終了

[申込開始]

日本造園学会員: 4月1日(火)~
一般の方: 4月25日(金)~

2025
5月18日(日)
10:00-17:00

受付場所 **セイホクギャラリー**
@東京大学・弥生キャンパス

東京メトロ南北線「東大前駅」徒歩約1分

《主催》日本造園学会100周年
記念全国大会運営委員会
家族・子ども参加企画チーム



※当日はできるだけ公共交通機関でお越しください。自転車の方はキャンパス外の駐輪場をご利用ください。

東大キャンパスで自然体験!?

子どもと自然を楽しむ4つのプログラム

2025年、日本造園学会は創立100周年を迎えます。記念大会の開催に合わせ、東京大学のキャンパスで、学会員の家族や地域の方と楽しむ4つの自然体験プログラムを実施します。緑のプロと一緒に、身近な自然を五感で楽しみませんか？

プログラム タイトル	A 植物たんてい 植物をかんさつして スケッチをしよう!	B キッズレンジャー 体験 東大の生きもの調査隊	C ツリー クライミング® 体験会	D 移動式 冒険 遊び場
定員・申込	15人・要事前申込	各回20人・要事前申込	各回10人・要事前申込	定員なし・申込不要
対象	年少(3歳)以上	未就学児~どなたでも	小学生以上	未就学児~どなたでも
実施	マリア・エルミロヴァ博士 (千葉大学)	NPO法人 NPO birth	全国1級造園施工 管理技士の会	NPO法人 プレーパークせたがや
10:00	10:00 ~11:30	①10:00 ~11:30	①10:00 ~11:00	10:00 ~17:00
11:00			②11:15 ~12:15	時間内入退場自由 小雨決行
12:00	小雨決行	①②とも小雨決行	①②③とも雨天中止	※雨の場合は、 室内で実施します。 時間は13:30まで。
13:00		②12:30 ~14:00	③13:15 ~14:15	
14:00				
15:00	14:30~17:00 @弥生講堂アネックス 募集22人(要事前申込)			
16:00	100周年特別公開フォーラム「ランドスケープX子ども」 スクリーンからグリーンへ誘う空間・活動・つながり~			
17:00	[前半] ランドスケープ分野の研究者6名から研究動向を講演形式で共有 [後半] 研究者・行政・NPO関係者・市民の皆さまとワールドカフェ形式で意見交換			



【植物たんてい】キャンパスを歩き、植物のスケッチ(絵)を描こう!どの植物を描いたかクイズにしたり、図鑑で名前を調べたりしながら、他の参加者と交流します。日本語のほか、英語、ロシア語でも対応可。



【キッズレンジャー体験】生きものに詳しいレンジャーと、キャンパスの生きものを調査します。調査道具を使って、キャンパス内の森や池で暮らす生きものを探して観察する、小学生くらいのお子さまにオススメ!



【ツリークライミング®体験会】ツリークライミングは、専用ロープなどを使って安全に木に登り、木や森、自然との一体感を味わう体験活動です。東京大学の大きなクスノキさんと一緒に楽しみ、友だちになろう!



【移動式冒険遊び場】「やってみよう!」が動機の世界は、まさに「自分の世界」。世田谷で冒険遊び場を運営して45年の「プレーパークせたがや」が、遊び道具を詰め込んだ「プレーカー」でやってくる!

「移動式冒険遊び場」以外のプログラムは**要事前申込**です。

<https://bit.ly/jila100-kids>

申し込みには、イベントプラットフォームの「Peatix」を利用します。キャンセルの場合はお早めにPeatixのマイチケットのページよりご連絡ください。**無断キャンセルはご遠慮ください。**

(注意事項)

- 先着順で、人数が上限に達し次第、募集を締め切ります。
- 本企画はレクリエーション保険に加入します。
- 雨天中止の場合は、申込のメールアドレスに当日午前9時までに連絡します。
- 未就学児の参加には保護者の同伴が必要です。小学生以上の保護者の同伴は任意です。同伴しない場合、プログラム終了時に迎えに来てください。本プログラムは託児サービスではありません。
- 飲み物、虫除けスプレー、着替え、タオルなど野外での活動に必要なものは各自でお持ちください。
- おむつ替え、授乳、お湯、食事、電子レンジ等が可能な直営休憩室があります。ベビーカーは家族休憩室に置いておくことができます。利用を希望される方は、受付のスタッフにお声がけください。
- 活動の様子について記録のため写真を撮影します。参加者の顔が写っていない写真を学会証および団体HP・SNS等で活動報告に使用させていただきます。場合によっては、写真撮影NGの場合はスタッフまでお声がけください。



日本造園学会 2025 年度全国大会における CPD について

日本造園学会企画委員会

日本造園学会 2025 年度全国大会プログラムは、原則として現地参加となります（ただし、ミニフォーラムの一部は、オンライン配信があります）。CPD 申請者の不利益が生じないよう、また、現地参加とオンライン参加の間に不公平が生じないよう最大限に考慮した結果、全国大会プログラムに対し従来通りの CPD 単位数が取得できるようにしました。

1. 参加（受講や閲覧）の場合

登録方法：

別紙「造園 CPD 日本造園学会 2025 年度全国大会受講・閲覧 参加証明書」（大会ウェブサイトから Word ファイルのダウンロード）を使用して、参加したプログラムにチェック（☒）し、合計単位数を記入の上、CPD 申請時の登録の際に、参加費の領収証とともに添付してください。なお、無料プログラムのみ参加の場合は Peatix チケットの写しを添付してください。

この参加証明書にて登録できるのは、教育形態番号 110（造園 CPD 認定プログラム「講習会等」の受講）です。

なお、建設系 CPD 構成団体会員で CPD 単位を取得されたい方は「造園 CPD 日本造園学会 2025 年度全国大会受講・閲覧 参加証明書」をご記入の上、cpd-office@jila-zouen.org までお送りください。確認後、参加証明書を発行いたします。

※補注：開催時間の重複するプログラムはいずれか一つしか単位の登録ができません。一部時間帯が被るプログラムについては、両方を受講された場合でも、最初から最後まで参加されたプログラムを申請ください。

2. 発表した場合

従来通り自己登録となりますので、自己登録画面に必要な事項を記入してください。

3. CPD 単位数

日付、催し（CPD 認定プログラム）、単位数、認定番号については、大会ウェブサイトをご覧ください。

委員会名簿

大会運営委員会

大黒俊哉（委員長、東京大学）
橋本 禅（東京大学）
甲野耀登（東京大学）
土屋一彬（国立環境研究所）
松岡達也（清水建設）
山本清龍（東京大学）
藤原章雄（東京大学）
飯田晶子（東京大学）
山崎嵩拓（東京大学）
坂本慧介（東京大学）
別所あかね（東京大学）
三谷 徹（東京大学）
寺田 徹（東京大学）
中村和彦（東京大学）
佐藤英介（石勝エクステリア）
寺田光成（日本体育大学）
マリア エルミロヴァ（千葉大学）
遠藤賢也（東京大学）

大会運営委員会アドバイザー

加我宏之（大阪公立大学、学術委員会）
新保奈穂美（東京大学、学術委員会）
加藤友規（京都芸術大学、社会連携委員会）
清水一樹（清水造園、社会連携委員会）
栗野 隆（東京農業大学、式典アドバイザー）
荒井 歩（東京農業大学、式典アドバイザー）

企画委員会

篠沢健太（委員長、工学院大学）
朝廣和夫（九州大学）
則久雅司（環境省）
浦崎真一（大阪芸術大学）
相田 明（岐阜県立国際園芸アカデミー）
上原三知（信州大学）
金岡伸夫（（有）金岡造園）
川口将武（大阪産業大学）
菊池佐智子（（公財）都市緑化機構）
岸 孝（（株）プレイスメディア）
栗原正博（埼玉県立秩父農工科学高等学校）
中山直樹（環境省）
橋本啓史（名城大学）
牧田直子（南九州大学）
水内佑輔（金沢大学）
守谷 修（国土交通省）

